こてつ物語番外編　千里眼の御子

yuki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
こてつ物語番外編　千里眼の御子

【Ｎコード】
Ｎ２５７７Ｘ

【作者名】
ｙｕｋｉ

【あらすじ】
こてつ物語の、御子の過去のお話。
捨て子だった御子は千里眼を持っている事を心配していた養父が亡くなり、養父を恩人と慕う真柴組の組長に預けられる。
でも、この「真柴組」お人好しの集まりで、御子が心を見透かそうとも、御子に向けられた愛情と信頼が揺らぐことは無かった。
組長と女将さんから向けられた愛情。ハルオの成長への願い。やがて始まる良平との恋。血は繋がらなくとも、心で繋がった家族の物語。

1

コロン、コロン。

私はいつも身につけているお守り袋の中から、小さな金属の塊を取り出して、手のひらの上で転がしてみる。その感触を確かめるように。

隣ではまだ赤ん坊の真見がぐっすりと寝入っている。昨夜、少し夜泣きをしたせいだろう。台所からはハルオと今日は休みらしい香が昼食の準備をしている声が低く聞こえてくる。

この時間は深夜まで営業している店に関わったり、見回りに出ていた者達はまだ眠っているし、日中の露店などを切り盛りする者達は仕事の真っ最中で、店に出払っている。

事務所も人影がまばらで、お義父さんと良平以外は、たまに誰かが報告に顔を出すぐらいだ。

組の中がいちばん平和な時間。私は真見の横でつい、うとうとしてくる。

いけない。大事なお守りの中身、無くしでもしたら大変だわ。私は金属の塊を元の袋に詰め直す。良平の足を貫き損ねた、その弾丸を。

そしていつものように身につけると、そのまま思い出の中へと心を沈めていく。

事件があった日はその年一番の寒さで、夜には雪になるだろうと言われていた。

日中の薄日が差す時間でも、あまり気温は上がらず、しっかりとストーブを焚かないと部屋の中にいても寒かったが、組の中はさらに寒々しい、不安な空気が流れていた。

一番若い良平を中心とした一部組員が、組長に突っかかっていたのは知っていた。だが当時私はまだ十五歳の入試を来月に控えた受験生で、組の事務所はおろか、組長の部屋にさえ無断で近づく事を禁じられ、部屋にこもって勉強しなければならなかった。

ただ、前日に顔のなじんだ何人もの組員の姿が忽然と姿を消したので、ただ事ではない事が起こっている事だけは分かっていた。

あまりに不安なので『力』を使おうかどうしようかと迷っていたが、組長と彼らは話がついたらしく、皆、自分の部屋に戻って行ったので、私はもう少し様子を見ようと、自分の勉強に取りかかった。

しばらく経って、何か温かい飲み物でも飲もうと自室を出ると、『力』を使っているわけでもないのに、何とも言えない、嫌な予感に襲われた。

こっそりと事務所を覗くが、いつもと何ら変わりはなかった。それでも落ち着かなくて若い組員の部屋に顔を出すと、良平の姿がないのに気がついた。

「良平さんは？」

部屋で漫画雑誌を読んでいる若い組員に聞く。私は組長の娘のように扱われているので、組員達は皆、親切だった。

「あれ？　どっかその辺にいませんか？　トイレにでも行ったのかな？」

組員はそう言ったが、絶対、トイレなんかじゃない。私は確信があった。良平さんはもう、組の中にはいない。

どうしよう？　組長に言おうか？　でも、良平さんは組長ともめてたみたいだし。余計なお世話かもしれない。だけど。

心の中に嫌な予感は広がるばかり。私は我慢できずに組長の部屋の前で声をかけた。

「組長、すいません。良平さんが見当たらないんですが」

「良平が？」

組長は即座に聞き返した。

「あの、私、嫌な予感がするんです。組長の心を覗いた訳じゃないんだけど、どうしても落ち着かなくて」

言い訳がましく聞こえるかもしれないけど、本当だから仕方がない。

部屋の障子が開き、組長が出て来る。奥に女将さんの心配そうな顔がちらりと見えた。

「いつからいないんだ？」
「分かりません。さっき部屋を覗いたら、もういませんでした。だいぶ前からいなかったのかも知れません」
「まずいな。事務所を見てみよう」

そう言って組長は事務所に向かう。私は何がまずいんだろうと思いながらついて行ったが、事務所の前に来たところで、ちょうど扉が開いた。

「あ、組長！　大変です！　良平の奴が麗愛会本部に一人で殴りこみをかけました！」

組長が目を見開き、私は息を飲んだ。

「それで良平はどうなったんだ？」
組長が叫ぶ。

組織の本部にたった一人で殴りこみをかけて、無事で済むはずがない。

「分かりません。いま、本部前は騒然としているそうです。警官や救急車が駆けつけて、一人銃で撃たれたらしいって話もあります」

それを聞いた若い組員が、
「畜生！　すぐ、助けにいきましょう！」
そう言って飛び出そうとしたが、組長が抑えた。

「もう遅い。全て終わった後に違いない」

その時、事務所の電話が鳴って、すぐに組長がでた。短いやり取

りが交わされる。

「良平が銃で撃たれて、病院に運ばれたそうだ。かなり危ない状態らしい。誰かすぐに車を出してくれ」

組長の言葉にさっき、助けに行こうと言っていた組員が、車のキーをつかんで出て行った。私は慌てて保険証や印鑑を取りに行く。ああ、悪い予感が当たってしまった……。

2

私が真柴組に連れてこられたのは、中学に入学して間もなくの時だった。

もともと私は捨て子で、それまでは殆んど捨てられていた神社の神主に育てられ、成長した。

赤ん坊の時に拾われた直後は、さすがに乳児院に預けられたそうだが、育ての父である神主は私が何か特別な力を持っている事に、すぐに気がついたらしい。私を引き取って育ててくれた。

成長と共に、私の力が人の心を読む力、「千里眼」であることが分かった。

養父は職業柄もあるのだろうが、優しく、厳しい人だった。私とは父というよりは祖父の様な年周りだったが、人当たりがよく、行動的で、観察力に優れた人だった。

神をあがめ、自然を愛し、何より人の世を愛した人だった。人に分け隔てなく、誰にでも親切に接する事が出来る人だった。なので私の力もごく自然に「神に賜ったもの」と受け入れてくれた。

私は養父にはよく、叱られたものだった。養父は私のしでかすイタズラには、大抵勘づいた。

さらには私が『力』を使おうとする時も、すぐに気がついてこっぴどく叱りつけてきた。

子供の頃は不思議だったが、今考えればなんてことはない。小さな子供が急に何かに集中しようとすれば、おとなしくなるし、態度も変わる。おそらく何か、癖なども現れただろう。

それに養父は、人の心の自由を守る事がいかに大切かを、幼い私にも丹念に言い聞かせてくれた。心の自由の大切さ、それに伴う孤独、そんな心を預ける事が出来る存在を得ることの難しさと、素晴らしさをたくさん教えようとしてくれた。

そして、本当は人は孤独なんかじゃ無い。誰が心を読まなくても、神様はちゃんと人の心を知っていて、すべてを見届けて下さっている。人間にいちいち手出しや口出しをしないだけだと。

どんな時でも誰かが自分の心を知っているというのは、子供の頃には正しく生きよという戒めになったし、成長後は決して孤独になることは無いという励ましになった。

さらに大人になると、私だけが人の心を一方的に知る罪悪感から、私を救ってくれた。そして神なんかじゃない私は、他人の言葉を聞き、自分の心を伝えたいと思うようになった。

私が覗く世界なんて、この世の森羅万象に比べればわずかなもの。そこに頼りたくない。

人間には言葉がある。言霊という古代から伝わる考え方だってある。人の言葉には必ず想いがあって、それは私の覗く世界よりずっと深く大きいもの。それを伝える努力を惜しんではいけない。

そういう事を大切にしていれば、人は孤独を恐れる必要なんてない。そして、覗かれることのない心は、いつでも自由の空を駆け巡る事が出来る。私は今ではそう考えるようになっている。

伝わる想いも大事だけど、伝えようとする心は、もっと大切なのだ。そしてそれは、必ず誰かに伝わるものなのだ。

でも、私が真柴に来た時には、私は心を閉じていた。養父の想いは私にまだ、届ききってはいなかった。

私が十二歳の時、養父が癌の宣告を受けた。養父は入院し、私は毎日養父を見舞った。

神社には養父の息子家族がやって来て、息子が神社を継ぐ準備を始めた。養父に何かあったら息子が継ぐことに初めからなっていたらしいが、渋々継いだらしいのが目に見えて分かった。

息子の方は本当は何か商売事をやりたかったらしいが、いずれ神社を継ぐ約束があるために、好きでもない仕事と修行をしなくてはならなかったと、あとから聞かされた。

そんな息子家族だったから、心を読まないように彼らに近づかず、あまり愛想のよくない私は、どうもよく思われなかったようだ。なんだか態度が冷たく感じる。

気まずさから私は彼らの心を覗いてしまった。真っ先に飛び込んで来た感情は、とうとう神社を継がねばならなくなった息子の恨み。

それに付き合わされてしまった家族の愚痴だった。

さらに私の事は、

（気味が悪い）

（邪魔な子）

と言う思いが、強く、はっきりと伝わってしまった。

これでは視線が冷たく感じたわけだ。彼らにしてみれば私は、人生半ばでやむなく継いだ稼業には、厄介な得体の知れないコブがついてきたと思っていた。それが彼らの本音だった。

私は彼らの本音を知っている事を叫びたいほどだったが、そんな事やるだけ無駄な気がした。

気づく気のない相手に、言葉じゃ彼らに私の心は伝わらない。そんな思いに支配された。

私は知りたくもない事を知ってしまい、伝えたい相手に伝える事が出来ない自分の『力』に苛立ちを覚えていた。不快な心をまきちらす他人にも、心を開く気にはなれなかった。

養父が亡くなると、こんな人たちと家族として暮さねばならないのかと思うと、私は暗澹たる気持ちになった。勿論向こうも同じ思いでいた。

私は心を閉じ、他人の心を遮断した。それまでこんな『力』を持っているにもかかわらず、こういう思いをせずに済んでいた、養父の庇護の大きさだけを懐かしがって過ごしていた。

そんな中で、養父の葬儀の数日後、突然見慣れない男性が訪ねてきた。私に会いたいと言う。息子家族も知らない人らしい。

「私は君のお父さんに、君の事を任された者だ。君はこれから私と暮らす事になっている。お父さんの遺言だ」そう言って、その人は私にほほ笑んで見せた。

私はわけが分からなかったが、確かにそういう遺言が残されていたらしい。息子家族はためらうことなく私を彼に預けると言った。

「三日後迎えに来ます。荷物は後で送ってください。まずこの子にはウチに慣れてもらいたいので」

そう言って私は住み慣れた神社をあっけなく後にする事になった。もともとネコの子のように拾われて育ったんだもの。ネコの子のようにもらわれても仕方がないわ。

私はそんな事を考えながら、約束の日に引き取られていった。半ば、ヤケだった。

3

連れてこられた建物は、プレハブより少しはマシかというような、古い、小さな建物だった。

ただ、その入り口には「真柴組」の古めかしい木の看板が掛けられている。土木工事屋さんかなんかな？

しかし、事務所の様な所に足を入れると、とたんに野太い声で、

「組長、お帰りなさい。御苦労さまです」

と、一斉に声がかかった。くっ、くみちょおう？

「皆集まっているな。今日からここで暮らす、御子ちゃんだ。この間中学に上がったばかりだ。大事な親を亡くしたばかりなんだ。みんな、親切にしてやってくれ」

組長と呼ばれた人はそんな事を言っているが、こっちはそれどころじゃなかった。右も左も強面の男性の顔、顔、顔。私は息を飲むばかり……あ、女の人も、いた。

「こんにちは、いらっしゃい。私は組長の妻、佳苗よ。みんな、女将さんって呼んでくれているの。これからよろしくね」

よろしくねと言われても、私は返事さえできない。だって、ここって「その筋の稼業」のところでしょ？　なんか私、騙し打ちに会って連れて来られちゃったの？　でも、遺言って言ってたし。

「みんなに顔も見せた事だし、奥に入ってもらっていいでしょう？

ここじゃ詳しい話も出来ないわ」

女将さんと呼ばれているという女性が、組長さんとやらに声をかける。

「そうだな。落ち着いて説明しよう」

そう言って私は事務所の奥にある引き戸で仕切られただけの座敷に通される。

「まず、自己紹介だ。私はここの組長を務めている、真柴清造という者だ。こっちはさっきも言った通り、妻の佳苗。妻が君の面倒を見てくれることになる。愚妻だが仲良くしてやってほしい」

組長が説明しているうちに、女将さんがお茶を入れてくれる。ビックリし過ぎて喉が渇いたので、熱くても一気に飲み干してしまった。それを見て女将さんはジュースを出してくれた。

「あの、どうして私を引き取る事になったんですか？」

と、言うか、私ここで無事で済むんだろうか？　これからどこかに売り飛ばされるとか、まさか身体売らされるとか？　ど、どうしよう？　少し頭が回り始めた私はヤケになった事を後悔した。

「順を追って説明しよう。実は君の養父だった人は、私の恩人なのだ」

「恩人？」って事は、私、息子家族に売り飛ばされた訳じゃないの

ね。でも、あのお父さんにこんな知り合いがいたの？　確かに人に分け隔てのない人だったけど。

「実は恥ずかしい話、ウチの組はあまり稼ぎが良くない。一時は本当に組をたたもうかと思う時があったのだ。だがうちの組員は皆、施設上りのみなしごばかり。年配の者は戦後の混乱で親を失った者たちだし、若い者は水商売の女が生んで、生活できずに手放されたような生い立ちだ。ここを失えば皆、行き場を無くしてしまう。せめてもの神頼みと、君の育った神社に通って、お参りしていたのだ。その時、君のお父さんに声をかけられた」

稼ぎが良くない。やっぱり身売りコース？

「正直その時は、良からぬことも考えたのだ。立場の弱そうな店々を脅して、ショバ代を多くむしり取ろうか、粗悪品やバッタ物を、どこかに高く売りつけようかと」

普通、「その筋の人」の仕事って、そういうものなんじゃないの？　詳しくは知らないけど。

「ところが君のお父さんは、私を色眼鏡で見る事もなく、私の話に耳を傾けて下さった。私が見栄や自分の欲望のために組を残したいのではない。不幸な生い立ちから世間を追われて、行き場を無くした者達の生きる場所を失いたくないだけだと、信じて下さった。愛も教育も受けられなかった者達が、家族のように助け合って生きる場所だと理解して下さったのだ。ここを失えば皆、他の組織に流れて悪い道へと進んでしまう。それを避けたいだけなのだと、分かって下さった」

なんだかここって、普通の「その筋」とは大きくかけ離れてるの

ね。お父さんが同情したわけだ。

「そして、祭りの夜店を出させてくれたのは勿論、つてを頼って、他の祭りや催し物でもウチに協力してくれた。神主さんが私の様な者と関わっては、色々困る事もあったであろうに、そんなそぶりは一度も見せたりはしなかった。おかげで組は道をそれた真似をすることなく、堅実で固いシマを得る事が出来たのだ」

なんというか、お父さん、何やってたの？　って言うか。でも、お父さんらしいと言うか。

「そんな君のお父さんが病気になられた。お父さんはご自分の寿命をご存じだったようだ。そこで私に君の事を相談された。君のお父さん亡きあとに、君を引き取ってくれないかと聞いてきたのだ。我々夫婦には子供がいない。こんな稼業では堅気の子を養子に迎えても、子供が白い目で見られてしまう。だから子供はあきらめていると、以前話したのを覚えておられたようだ」

話が自分に及んで来て、思わず緊張する。私、ここに何を求められてるんだろう？

「君は人の心が読めてしまうそうだな？　それで人から嫌な目で見られる事も多かったとか」

そう、隠しても隠しても、この能力は隠しきることが出来ない。気味の悪い子、気持ち悪い子と言われてしまう。きっと、これからも。

「どうだろう。思い切って、ここで暮らし続けてみたいとは思わな

いだろうか？　ここにいれば余計世間の目が冷たいかもしれないが、あの神社で、そりの合わない家族と暮らす事を考えたら、いくらかはマシだと思えるのだが。君の将来もあるから養女にしたいとは言わない。だが、君が大人になるまでは、ここで暮らしてもらえると私達夫婦は嬉しいのだが」

そういうと、組長と女将さんは、私の顔をじっと見つめて返事を待っていた。

4

「待って下さい。だって私、まだほとんど子供みたいだし、色気もないし、心は読めても嘘つくの下手だし、男の人ひっかける方法なんて知らないし。たぶん、なんの役にも立ちませんよ？」

私は慌ててそう言った。はっきり言ってこういうところで女の子が出来る事ってそれしかなさそうだけど、私、全くの未経験者だ。まだ、「大人の女の子」になったばかりだし、出来れば他を当たってもらいたい。

すると二人は顔を見合わせて、唖然とした。

「ほら、だから言ったのに。ウチの玄関使わずに組の事務所から入ってきたりするから。御子ちゃん、すっかり脅えているじゃないの」

女将さんが組長に文句を言っているようだ。

「その方が誤解なく、組の連中にも紹介できると思ったのだ。早く顔も覚えていいと思ったのだが」

「それで御子ちゃんが脅えて、変な勘違いしたら意味がないじゃありませんか」

組長はううむ、と一声あげると私に向き直った。

「怖がらせてすまなかった。言い直そう。御子ちゃん、籍こそ入れはしないが、君、私達の娘としてここで暮らしてはくれないか？」

「むす……め、ですか？」

「そうだ。私は君のお父さんのように立派な人間ではない。ここも

人生にはぐれてしまったあぶれ者達の寄り集まりだ。そんなところだが、ここの連中は見かけと違って心優しい者ばかりだ。私達は恩人の娘である君を、ただ、幸せにしたいだけなのだ」

ただ、幸せに。ああ、久しぶりに聞いた。この言葉。

昔、成長を見てもらうんだと言って、私がいた乳児院にお父さんに連れていかれて、帰るときにはいつも院長先生が、「ただ、幸せになってね」と、言ってくれたっけ。

お父さんも言ってくれた。「幸せに育てたい」って。こういう言葉って、真っ直ぐに伝わってくる。

ここは確かに普通のところじゃないかもしれない。ここで暮らせばいろんな事があるだろうし、今以上に白い目で見られるようになるのかもしれない。

それでも何だか、ここは悪いところじゃないような気がする。少なくともこの組長が言っている言葉は嘘じゃなさそう。言葉が違っていたとしても、私を思ってくれる想いは本物だ。

だったら、いっそ思い切ってここで暮らしてもいいかもしれない。お父さんがそこまで信頼した人達なら、私、本当に幸せになれるかもしれない。

「分かりました。私、ここで暮らします」

私がそういうと、組長と女将さんは顔を見合わせて、にっこりとほほ笑んだ。

「でも、私の部屋に、鍵は付けて下さいね？」
念のために後で、脱出方法も確認しておこう。

そんな訳で私は真柴組で暮らす事になってしまった。勿論、鍵と脱出ルートも確認して。

組長の言っていた通り、ここの組員達は私に優しく接してくれる人ばかりだった。

私は養父の息子家族で懲りたので組長は勿論、組員達の心を読もうなんて露ほどにも思わなかった。
場所が場所だからすぐに気を許すことはできなかったけど、少なくともここでの暮らしは神社で息子家族との暮らしよりはずっと快適だった。

彼らは私を組長夫妻の娘同然に扱ったので、私は完全にここでは「お嬢様」になってしまう。

どう考えても私の柄に合わない扱いで、娘……下手すれば孫のような私にきっちり頭を下げ、丁寧な挨拶をしてくれる。申し訳なくてこっちの方が慌てて深く頭を下げ直してしまう。

神社にいた時はむしろこっちの方が「寄付」だの、「祭典費」だの、「奉納」だのと、人様に頼る事がたくさんあるので、いつでも心をこめて頭を下げるように気をつけていた。それがこうも気を使われるようになっては、ちょっと落ち着かない。

学校へ行こうとするたびに「いってらっしゃい、お気をつけて」

なんて言われると背中がムズムズする。みんな顔は強面だけど気は優しくて、見慣れぬ女の子の存在に、緊張しているみたい。

私は組長の事はそのまま「組長」と呼ぶ事にした。急に「お父さん」とも呼びにくいし、養父だった「お父さん」意外の人を、そう呼ぶのにもためらいがある。

それにホントにここで暮らし続けるのかも分からない。部屋に入ると鍵は必ずかけるようにしているし、いざって時は逃げられるように荷物もまとめてある。市役所の福祉課の電話番号も調べておいた。あと頼れるのは警察……こういう所相手に頼れるかな？　そして学校くらいか。まじめに通わなくちゃ。

父親代わりの人を「組長」と呼んでいるのだから、その奥さんを「お母さん」とは呼べない。みんなと同じように「女将さん」と呼ばせてもらう事にする。

女将さんはとても優しい人で、私にもとても気を使ってくれる。ううん、私だけじゃなく、誰にでもいつも気を使って、自分の事は後回しにしちゃう人。なんだか申し訳なくなっちゃうくらいで、誰もが女将さんを大事にしたいと思っている。

組長は私に事務所には無断で近づいてはいけないって言うから、私はここがどんな事をしているのか、本当のところはよく分からない。だから気を許せないんだけど、そういう仕事だけじゃく、女将さんにはいろんな雑用が沢山ある。

一緒に暮らす組員達の食事の世話や、各部屋の掃除、洗濯。これだけだってまるで寮か何かのように大量にこなさなければならない。

しかもみんな時間がマチマチで、朝早くから食材を仕入れに行く人、深夜、見回りをする人など、何だか真面目に汗をかいて働いているので女将さんも大変だ。

思わず私も手伝わずにはいられない。なんかここ、職業、間違えてるんじゃない？

5

だけど、ここはやっぱり「その筋」の世界だった。ある日夕食の席で組員の一人が組長に相談ごとを持ち出した。

「例の踊り子の件なんですが、酒屋の息子の付きまといがおさまらないそうです。とうとう踊り子のオトコに、脅迫までして来たようで」

「おい、子供の前だぞ。後にしろ」

組長が眉間にしわを寄せてそういうと、組員は慌てて口をつぐんだ。すいません、すいませんと、頭を下げている。

食事が終わると私と女将さんが後片付けをしている間に、組長達は事務所で話を済ませたらしい。私は相談をしようとした組員を捕まえて聞いた。

「ね、何があったの？」

「御子ちゃんには話せない内容です。勘弁して下さい」組員は小さくなって頭を下げた。

「私の事は知ってるでしょ？　あなたの頭の中の事、知ることができるのよ。教えてくれなきゃ、覗いちゃうから」

その時には私は組にだいぶ慣れていたようだ。組員達に嫌な思いをさせられた事もなかったし、女将さんも優しく、皆、親切でまじめな人達ばかりだった。

最初の頃の不安なんてすっかり無くなり、正直、下手に出た態度を示す組員達の事も甘く見ていたのかもしれない。

「まいったな。子供に聞かせるような話じゃないんだが」そういいながら、組員は説明してくれた。

ある踊り子に酒屋の息子が入れ込んでしまって、どんどんエスカレートしてきた。

「もっとこっちを向いて欲しい」
なんて言っているうちは良かったが、
「もっと彼女の出番を増やせ」
「舞台以外でも会いたい」
「他の踊り子をおろせ」
など、無理難題まで言ってくるようになった。

とうとう彼女の住んでいるところまでつき止めて、彼女が男性と暮らしている事を知ると、その男性に麗愛会という組織の人を雇って、ひどい脅しをかけるようになったそうだ。

「麗愛会は容赦のない事で有名だから、そのオトコの身も本当に危ない。だからウチで麗愛会の連中を追っ払ってやりたいんです」
「追っ払うって、喧嘩、するの？」
うわっ。ドラマや映画みたいな話。

「本当はそれを避けたいんですがね。相手が相手ですから、難しいかもしれません」

私は甘く考えていた。「喧嘩」という言葉を聞くと、子供たちが素手で殴り合うイメージしかなかったし、「踊り子」と聞けば普通

のダンサーが思い浮かんだ。「オトコ」と聞いてもその踊り子の恋人としての認識くらいがせいぜいで、その事情なんて見当もつかなかった。

現実感のない話に、私は観客になった様な面白さだけを覚えてしまう。

翌日私は学校の帰りに、こっそり、踊り子がいると言う劇場に行って驚いた。

ここってストリップ劇場じゃない！　はあ、こういうところだから踊り子っていうんだ。

恥ずかしくてとても正面にはいられない。裏に回ると、綺麗な女の人が男の人と揉めているのが見えた。別の男の人もやって来て、男同士で揉めはじめる。

やだ。いきなり現場に立ち会っちゃった。私は思わず身を隠す。

少し離れているけど、『力』を使って見る。うわあ、酒屋の息子、のぼせようがすごい！　踊り子の顔しか浮かんでこない。あ、でもちょっと良心が痛んでる。お店のお金、彼女へのプレゼントに使っちゃってるんだ。親に申し訳ないって気持ちも少しだけ感じてるんだ。

この踊り子の女性は怖がるばかりだわ。そりゃ、そうだよね。何するか分かんないような感じの人を目の前にしてるんだから。恋人が守ってくれるのを必死に頼ってる。

あれ、でも、この恋人、ちょっと冷めてる感じ？　あんまり彼女を本気で守ってなさそうな。むしろ迷惑がっているような。なにコイツ。頼りないな。

何よ、コイツ、この女の人のこと、完全に商品扱いじゃん。怪我でもされたら舞台に穴が開く？　慰め役のはずがエライ事になった？　ひどい！　彼女の事なんて、考えてないじゃん！

そこにチンピラ風の男達が出てきて、その頼りない恋人に詰め寄っている。あれが麗愛会か。

ふん。ちょっとくらい、脅かされてもいいかもね。こんな薄情者。私はそう思っていたが、チンピラの心を呼んで考えが変わる。

え？　コイツ、拳銃持ってる！　女性が言う事聞かなきゃ、手や足を撃ち抜く気でいるわ！

ど、どうしよう。あの人達、このままじゃ大怪我しちゃう。警察に知らせなきゃ。

「御子ちゃん」

私は急にうしろから声をかけられて、悲鳴をあげそうになった。

そこには組長がいた。すぐに口をふさがれる。

「とんでもないお転婆だな。こんなところに顔を出すとは」

後ろに何人かの組員もいた。

「組長、あの恋人ってひどいわ。彼女をまるで物みたいにしか考えてないの。こんな奴のために誰かが怪我したら損よ」
私は必死で言った。だが、
「力を使ったのか。君のお父さんはこころよく思わなかったはずだが」

確かにお父さんは私に力を使うのを禁じていた。止める人がいなくて私の気も緩んでいるかも。

「だって、お世話になりっぱなしだから、何か役に立てると思ったの。そしたら守る相手がこんな男だなんて」
私は憤慨していた。

「そんなことは分かっている。あの踊り子も承知の上だろう」
「ええ？　騙されてるんじゃないの？」

6

「違う。こういう商売にはよくある事だ。売れっ子に変な事が起きないように、好みの男をわざとあてがっておくのだ。悪い虫もつきにくくなるし、踊り子には癒やしになる」

「そんな」

一緒に暮らす男性って、そんなに割り切れるものなの？

「大人の世界に首を突っ込み過ぎだ。私たちだってあの男のためだけに出てきたわけではない。この劇場は大事なシマだ。彼女は一番の売れっ子だから、麗愛会の奴らも目を付けた。ここを荒らされては、ウチの面目が立たん」

「だから何なの？　面目なんかのために、喧嘩をするの？　こんなの喧嘩じゃない。相手は銃を持ってるんだから」

「銃？」

組長の眉が上がる。

「全員か？」

組長の目の色が変わり、真剣な声になる。

「ううん。赤っぽい派手なシャツ着た奴だけ。でも、本気で人を撃つ気でいる。ねえ、逃げて警察に知らせようよ。銃で人を撃とうとする人間に敵う訳ないよ」

私は必死で組長の手首にしがみついた。お父さんを亡くしたばかりなのに、組長にまで何かあったら、私、どうすればいいんだろう？

その時組長が、何ともいい難い表情をした。戸惑うような、優しいような、悲しいような、表情。

「大丈夫だ。心配はいらん。御子ちゃんが銃がある事を教えてくれたから」

そう言って私の手を外し、頭に軽く手を乗せ、なでた。

「それにこれは私達の仕事なんだ。逃げるわけにはいかん。御子ちゃんはここに隠れていなさい」

「でも」

「こちらも武器なら持っている」

そう言って組長が私に短刀を見せた。背中にひやりと汗が流れる。

「こんなものを見せたくなかったが、ここはこういう世界なのだ。我々は命と顔を張らなくては、生き延びる事が出来ない。君を引き取ったのは、やはり間違いだったのかもしれない。とにかく今はじっとしていなさい。絶対に、大丈夫だから」

そう言って組長達はチンピラ達に向かって行った。

組長がチンピラに何か声をかけると、チンピラも何かを言い返したようだ。何を言いあっているのかまでは聞こえない。

でも、その直後に「やっちまえ！」と、チンピラが叫ぶと、一斉に喧嘩が始まった。

私が教えた派手なシャツの男はすぐに真柴の組員に捕まえられ、銃を取り出す暇もないまま腕をとられていた。すかさず組員が懐から銃を探り出すと、逆にチンピラに銃を向ける。その男が真っ先に逃げ出した。

他の男も組員に向かってナイフのような物を振りおろすが、組員は短刀ではじき返し、相手を蹴り倒してしまう。組長も相手に短刀をつきつけ、何かを言っている。男達は「畜生！」と叫んで逃げようとする。

その一人が思いがけず、私の方へと駆け出してきた。向こうも私に気付いて、ナイフを突き出してきた。私はとっさに心を読むと、彼が私の前方にナイフを振るつもりなのが分かった。

私は夢中でよけながら、近くにあったゴミ箱をそいつに向かって投げつけた。ゴミ箱は見事に当たって男はひっくり返り、私は組長達に向かって走った。

男は舌打ちを一つ打つと、諦めて走り去って行った。

「大丈夫か？」

組長が駆け付けた私に聞いた。

「私は大丈夫。あいつの動きが読めたから。それよりみんな、怪我は無いの？組長は大丈夫？」

私は組長に怪我がないか確かめる。よかった、何ともなさそう。

すると、また組長の手が私の頭に乗せられた。

「御子ちゃん、もう二度と、組の事に首を突っ込むな。君に何かあったら、君の養父に私は申し訳が立たない。こんな心配は二度とさせないでくれ」

「心配、してくれていたんですね」

その目を見ただけで、私は申し訳なさでいっぱいになった。

「当然だ。君は私の娘なのだから」

「ごめんなさい」

お父さんと呼べなくて。そしてありがとう。こんなに大事に思ってもらって。

ふと、見ると、隣で酒屋の息子が組員に脅されていた。

「麗愛会の連中は、お前のために恥をかかされて頭に来ただろう。こんなことしていると、間違いなく寿命が縮むぜ。おとなしく親父の仕事を手伝っていろ。心を入れ替えるなら、俺達もお前のことは考えてやってもいいぜ」

「で、でも、彼女は」

「お前は彼女をこんな事に巻き込んだ。怖がられることはあっても、好かれるはずないだろうが」

酒屋の息子はシュンとしていた。反省はしている様子。

「この人、親に申し訳ないとはずっと思ってたよ。本当は謝りたいみたい。許してあげたら？」

私は少しだけかわいそうになって、彼の代わりに代弁してあげる。

「分かっている。コイツの親父さんの酒屋も、ウチの関係先だ。コイツの目を覚ましてほしいとは常々言われていた。心配いらない」

この組、やっぱり普通とは違うわ。私、ここで幸せになれそう。

私は心からそう思った。

7

でも、この騒動は組長にとってはかなり衝撃的な出来事だったらしい。まさか私が組がらみの喧嘩沙汰に巻き込まれるとは、考えていなかったそうだ。

「妻とゆっくり話がしたいから、誰も立ち入らないように」

そう言って組長は女将さんと共に、自室にこもってしまった。

一時間、二時間と時が過ぎても、二人はなかなか出てこない。日がすっかり暮れてしまってから、ようやく組長が私に、「話があるから部屋に入るように」と声をかけた。

組長は難しい顔をして、女将さんは悲しげにしている。二人の様子で言われる言葉が分かったので、私は先に自分の気持ちを言った。

「私、ここを出て行きたくありません。あの神社には戻りたくないんです」

「あの神社に戻れとは言わん。だが、他にも御子ちゃんが暮らせる場所はある。役所に相談してどこかの施設で暮らすといい。　少なくともここのように、命に関わる事に巻き込まれる心配はしなくて済む」

もう決めた。そんな表情で組長が言った。

「じゃあ、言い変える。私、他のどこにも行かない。ここで暮らしたいの」

私も負けずに断言する。

「ここでは好奇心の強い君の、命が危ない。今日の様な事がここでは頻繁に起こるのだ」

「そんなの勝手だわ！　お父さんの遺言はどうなるの？　組長はお父さんの信頼を裏切るつもり？」

「君の養父には申し訳ないと思う。私はあまりにも軽々しい約束をした。だが、彼も分かってくれると思う」

組長は少しだけひるんだ表情をしたが、すぐ、目に力を入れてこう言った。

「お父さんのこと、勝手に決めないで。お父さんはそんなに軽く何かを頼んだりする人じゃなかった。それに組長も言ったじゃない。私がここで暮らすと嬉しいって。あれ、嘘だったの？」

「嘘ではない。だが、それもよく考えれば軽率であった」

「軽率だったから、無かった事にするの？　私をここに連れて来ておいて？　組長は私に娘になってくれって言ったのに！」

私はありったけの声をあげて怒鳴った。自分の中の何かがはじけ飛んだ気がした。要は、キレてしまったのだ。

「大人って勝手すぎる。育てられないからって赤ん坊捨てちゃったり、心配だからって引き取って育てたのに、自分が病気で死ぬからって私の知らない内に預け先決めちゃったり。今度はやっぱり無事に育てる自信がないから、よそに行けって言うの？　私、ネコの子みたいに捨てられて、拾われたけど、ネコじゃないのよ！」

言うだけ言うと、私は組長の部屋を飛び出して、自分の部屋へと駆けこんだ。そのまま鍵をかける。鍵付きの部屋を要求しておいて

正解だった。

組長と女将さんが弾かれたように追いかけてきたのが分かった。部屋の扉をたたいて私を呼んでいる。でも私は扉を開ける気はない。こうなったら籠城してやる！

「私、絶対にここを出て行かない。組長が思ってるほど、私、子供じゃない。大人しく振り回されてなんかあげない。自分が暮らしたいところで暮らすわ。私はここを自分のウチにしたいの。誰にも邪魔はさせないんだから！」

扉の向こうにそう、怒鳴る。でも、組長は言った。

「いい分は分かった。だが、ここは御子ちゃんにふさわしいところじゃない。ここの組長は私だ。私は決して君がここに残る事を許さない」

そして、部屋の前から去る気配がする。私は力が抜けてしまい、ふうっと深いため息をついた。

組長が認めてくれなきゃ、私はここにいられない。そんなことは分かってる。でも。

組長は私に娘にならないかと言った時、私の事を「ただ、幸せにしたい」と言ってくれた。私はその　組長が、喧嘩に向かおうとしたあの瞬間、心から頼りにした。まるでお父さんのように。

組長が無事で嬉しかったし、私を心配してくれたことはもっと嬉しかった。

心から私の幸せを願ってくれる人の元で暮らしたい。組長と女将

さんがいる、ここにいたい。

だけど、もし、組長が本気で私をここから追い出そうとしたらどうしよう？　さっき、ここに残る事を許さないって言ってたし。

私は急に不安になって、涙が出てしまった。そしていつしか眠りこんでしまった。

そして私は夜中近くに目が覚めた。何故なら、トイレに行きたくなってしまったから。

扉を開ければ気配が伝わるかもしれない。幸いここは一階。私は窓からいったん庭に出る事にする。　いざって時のためにまとめた荷物に運動靴も入っている。恥ずかしいけど庭で用を足そう。脱出方法　考えておいてよかった。こういう事に役立つとは思わなかったけど。

ところが窓から庭に下りたとたんに、年配の組員と出くわした。うわっ、見張られてたのか。

「私、トイレに行きたいんだけど」

そろそろ我慢もつらくなって、私は思わず言った。でも、組員は、「事務所のトイレを使って下さい。今、組長は自室ですから大丈夫です」

と言ってくれた。

年配の組員、孝之さんは私を事務所に入れてくれる。私は急ぎ、トイレを使った。

用が済んで出て来ると、事務所の応接セットのテーブルに、温かい食事が用意されていた。

「お腹がすいたでしょう？　女将さんが用意してくれました。食べて下さい」

そう、勧めてくれる。

「御子ちゃんが組長に言った事は筋が通ってる。組長以外みんな、味方です。頑張ってください」

良かった。みんな、私をここに受け入れてくれてるんだ。絶対にあきらめたりするもんか！

8

「組長だけが意地を張ってるんですよ。俺達も最初は不安だったし、戸惑いもありました。でもね」

孝之さんは、私が食べている間に説明してくれた。

「ここの連中は、みんな、御子ちゃんと同じような思いをして来たんです。何かの事情で生みの親と別れて、施設に入って里子に出されたり、養子になったり。それでそのまま幸せになる奴等も多いんですが、俺たちみたいに上手くいかない奴もいる。実は俺、片耳が聞こえないんです。手の指の動きの悪い奴もいるし、ちょっと持病がある奴もいる。千里眼とは違うでしょうが、スネやすくて施設でも問題児扱いされる。そして外れ者になって、ここにたどり着くんです」

「みんな、つらかったんだね」

私は食事を飲みこむ間に、相槌を打った。

「大人の勝手に馴らされて、つい、言いたい事も言えなくなっちまってるんですね。普通と違う弱みもあって黙ってあきらめちまうから、ヤケになってロクでもない事をする。それで気がつけば外れ者だ。でも御子ちゃんは違う。ちゃんと、自分の言いたい事を言った。そしてそれは筋が通ってると思う。俺達は人とは違うし、大人や社会の都合で見捨てられたり、拾われたりしたが、望んでそうなったわけじゃない。だから御子ちゃんが私は捨てネコじゃないと言った時、みんな胸がスッとしたんです」

「ごめん。深く考えて言ったわけじゃないの。あの時私、カッとなっちゃって」

「それでいいんですよ。本当に望んでいることは、ちゃんと伝えないと。ここをウチにしたいと言われて、女将さんだって嬉しかった

はずです。不安だ、不安だと言いながら、その茶碗も箸も、とてもうれしそうに女将さんが選んでいたんですから」

私は箸を止めて、今手にしている茶碗をあらためて見た。桜模様の可愛くて品のいい茶碗。それに合わせた桜色の女物の箸。男の人ばかりのこの組で、こんなものを使うのは私だけ。私のためだけに、女将さんが選んでくれたに違いない。

「私、ここに来た時に思ったの。ここならきっと、幸せに暮らせるって。今はもっと、そう思ってる」

「だったらあきらめないでください。あきらめちゃ駄目だ。絶対組長は折れるはずです。組長は御子ちゃんを幸せにしたくて、引き取ったはずなんですから」

うん。そうだ。あきらめたりしない。ここに来た日の組長と女将さんの目は、本当の気持ちを伝えてくれた。私はそれを信じればいいんだ。みんなも応援してくれている。きっと大丈夫。

お腹が膨れて孝之さんに励まされると、私の不安は吹き飛んだ。私は絶対に出て行かないと約束して、また、こっそりと庭から部屋に戻って行った。

籠城二日目。私の部屋の扉を女将さんがノックした。

「御子ちゃん、今、組長は事務所で朝の報告を受けてるの。今のうちに洗面所使った方がいいわ」

「女将さん、私、どうしてもここで暮らしたいの」

私は部屋から出て来て懇願した。

「分かってるわ。組長も昨日の事で神経質になり過ぎて、自信を失ってるのよ。でも、きっと大丈夫。本当は組長だっていてほしいはずだから。急に大きな娘をもって、戸惑ってるのかもしれないわ。もしかしたら照れてるのかも。だから心配しないで。学校には家庭の事情で二、三日休むと連絡したから。でも、ちゃんと勉強はしてね」

女将さんは私が洗面をしている間、そう言ってくれた。

そして朝食の乗ったお盆を持たせて、

「絶対組長は許してくれるから」

と、言ってくれる。

部屋に戻ってお盆の上のマグカップを持ってみる。小さなハートがちりばめられたカップ。これもきっと女将さんが選んでくれたんだろうな。ちょっと温かい気持ちで、ホットミルクを飲んだ。

なのに、その直後に組長の声が扉の向こうから聞こえた。

「どうだ、学校にも行けずにつらいだろう？　ここを出る気になったか？」

なんて言ってる。

「全然！　私、絶対にここから出ないから！」

私も言い返した。

「勝手にすればいい」

そう言って組長は扉を離れたようだ。私は手近な枕を蹴っ飛ばした。

籠城三日目。私はだんだんつらくなってきた。食事は女将さんが持ってきてくれるし、トイレは組長の隙を孝之さん達が知らせてくれるので、問題なく済ませる事が出来る。

でも、外の空気だってもっと吸いたいし、お風呂ももっとゆっくり入りたい。ここにはテレビもラジオもないから、いい加減退屈だ。手元のわずかな本と、教科書しか読む物もないんだから。

「そろそろ退屈だろう？　施設なら年の近い子と思う存分おしゃべりが出来るぞ」

組長がまるでこっちの心を見透かしたような事を言う。そうか。心を読まれるって、こんなに不愉快な事なんだ。うかつに読んじゃいけないのは、私が辛いからだけじゃないんだわ。

「そんなことない。今だって組長とお話出来てるんだから」

私がそういうと、

「だったら、もう、声はかけないぞ」

と言って、離れる気配がした。余計なこと、言わなきゃよかった。

籠城も四日目になってしまった。今日は組長は一言も私に声を掛けなかった。昨日の事があったせいだろう。あんな事を言わなければ、組長に懇願出来たかも知れなかったのに。私は後悔していた。でも、あの調子じゃ、懇願しても聞く耳を持ってくれなかったかもしれないけど。

夜になって女将さんが、組長がお風呂に入った事を教えてくれる。私はこの隙に用を済ませようとトイレに入った。そして用が済んで

出ようと扉を開けたところで、お風呂に入っているはずの組長とばったり会ってしまった。目が合うと何故か組長がその場から逃げるように踵を返そうとした。

このチャンスを逃したら、目を見て話す事が出来ないかも。

私はとっさにそう思い、組長の手首をつかんだ。どうしても話を聞いてほしかった。

9

「組長、なんで逃げるんです？　話を聞いて下さい」

今だったら組長がどんなに女性に対して照れ屋で、女の子の私に戸惑っていたのかが良く分かるけれども、当時の私は組長の心情に気がつく余裕がなく、何より私自身が幼すぎた。

組長の方にも余裕はなかった。私を育てるのが正しい事なのか、私にどう接し、応えていいのかが分からずにいたに違いなかった。

「逃げるわけじゃない。ただ、話す事もないだけだ。ここに置けない事に変わりはない」

組長は仕方なさげに私に向き合った。でも、その目はガンとして譲らないものがあった。

「この間の事は私、反省してます。心配かけて悪い事をしたと思ってます。でも、私ここにどうしてもいたいんです。私、ここにきてから幸せだと思いました。初めはビックリしたし、緊張もしたけど、ここの人はみんな親切だし、優しいし、何より私を気味悪がらずに受け入れてくれる。女将さんだって、組長だって、本当に私が幸せになる事を望んでくれている。心を覗かなくても分かるんです。ここはあったかい場所だって」

私はいっぺんにまくしたてた。少し息が切れるくらいだった。組長に口を挟まれずに言い切りたかったから。

組長は少しあっけに取られていた。その目が意外そうに丸められていた。

「ここに来て、幸せだったと言うのか？」

「今だって幸せです。みんな、私を受け入れてくれるから。組長が私の幸せを考えてくれてるから」

「私は受け入れていない。君には別の生きる場所がある」

「でも、私の事をいつも心配してくれてる。もし、私が別のところに行っても気にかけてくれると思う。お父さんみたいに。そうでしょう？」

組長は返事をしなかったが、否定もしなかった。

「ごめんなさい。私、どうしても組長をお父さんとは呼べないの。私のお父さんは一人だけ。でも、組長は私を幸せにしたいって言ってくれた。そう言ってくれたのは、お父さんと組長だけなの。もしかしたら私の本当のお父さんとお母さんもそう言ってくれていたのかもしれない。でも私、自分で聞いてないし。私、お父さんみたいに私を幸せにしたいって言ってくれる人のところで暮らしたい」

組長は私が手首をつかんだ手を、じっと見ていた。私はこれだけが頼りとばかりに手首を握り締めていた。組長がその手にそっと、空いている方の自分の手を重ねた。

「きっと、本当の御両親も、そう言っただろう。それでも何か事情でお前の手を離さなければならなかった。亡くなった養父だってこの手を離したくはなかっただろうが、病魔には勝てなかった。私がこの手を振り払ったら、お前は三度もこの手を親から離されることになるのだな」

組長は、深く、ゆっくりと息を吐いた。それはため息というより、まるで深呼吸のようだった。

「そんなことは二度も味わえば十分だろう。分かった。お前はウチの子だ。ここにいていい」

私は驚いた。こんなにあっさりと組長が折れてくれるとは思わなかった。

「ホ……ホントに？」

「本当だ。それに、私を何と呼んでもかまわん。私もお前の父を名乗れるような人間ではない。少なくとも人様に堂々と言える稼業はしていない。だが、お前は私の娘も同然だ。妻もきっとそうだろう。私達は、お前の手を振り払ったりはしない」

「私、ここにいていいのね？」

「それがお前の養父との約束だ。それに何より私がお前にここにいてほしい。娘というのがこんなに可愛らしいものだとは思わなかった。幸せを、願わずにはいられないのだよ」

「おと……」

「その呼び名は無理に使わなくていい。大切な養父との思い出なのだろう？　大事に取っておきなさい」

組長はそう言ってほほ笑んでくれた。

「ありがとうございます。組長。でも、私、組長をお父さんみたいに思ってます」

「ウチの妻は？」

「勿論、お母さんみたいに」

「それでいい。佳苗も喜ぶ」

そう言って組長はほほ笑んだが、何かを思い出したかのように顔をゆがませた。

「すまないが、今だけこの手を離してもらえないか？　風呂の前に用を済まそうと思っていたところなんだ」

私は慌てて手を離し、組長は急いでトイレに駆け込んだ。

随分タイミングよく組長と鉢合わせをしたと思ったら、実は女将さんが組長が「用を足して風呂に入る」と言ったのを聞いて組長を引きとめ、私がトイレに行くように早めに知らせてくれたらしい。

お互い顔も見ずにいる時間が長くなれば、余計な意地が邪魔をするだろうと女将さんが心配をしての事だったようだ。それにトイレの前じゃ、意地を張ってもカッコをつけてもサマになんかならない。つまり、私達は女将さんの思惑に、まんまと引っ掛かったのだ。

私は「お父さん」の呼び名は、心の中に閉じ込めていたけれど、女将さんの事を時々小声で「お母さん」とこっそりと呼んでみたりしていた。組長の手前、人前では女将さんとしか呼べなかったけれど、　きっと女将さんは気がついていたと思う。だって、私が「お母さん」と呼んだあとは、とてもうれしそうな顔、していたから。

ともあれ、こうして私は組長夫妻に、この真柴組で育ててもらうことになった。

10

真柴組での暮らしに私はすぐになじんでしまった。とにかくこんなに大勢の人たちに受け入れてもらったのは初めての事なので私はとてもうれしかった。

学校ではついつい、人の考えを言い当てたりして気味悪がられてしまうので、なるべく地味に、目立たないように過ごすよう気をつけていた。

影では色々あったんだろうけど、私自身が気味悪い上に私が暮らす「その筋の家」に関わりたくない事もあってか、表だっていじめてやろうとか、何かしてやろうと言う気は起きなかったらしい。皆、恐々と遠巻きに私を見ている感じだった。それも私には都合がいい。

だけど、女の子同士というのはそんな事には関係なく、気があったりすることもある。

私はそういう数少ない友人とそれなりの距離をとり、学校以外では関わらないようにして、まあまあ波風立てずに楽しい中学校生活を送っていた。

そして、組に帰れば出来るだけ女将さんを手伝った。主に組員達の食事の支度や、後片付けがほとんどだったが、日曜などはここで暮らす人たちの大量のシーツを洗濯したり、お客さん相手でちゃんとした身なりをしなきゃならない人たちの沢山の靴を磨いたり、アイロンをかけたりした。

各自の部屋は自分で掃除することになっていたし、供用の場所も持ち回りで掃除する事になっていたけども、男の人たちが不規則な仕事を抱えてのこと、相当いい加減な事も多い。そんなところは女将さんも頻繁には手が回らないので、気がついた時は私が掃除し直していた。

片耳の聞こえが良くないので、接客や交渉事には向かない孝之さんは、よく、組の雑用を言い使っていて、組の中にいる事が多かったので、ちょっと重い荷物を動かす時や、買い物の荷物持ちなどで私を手伝ってくれた。

でも、私に親切なのは孝之さんばかりじゃなくて、みんな、私には丁寧に接してくれる。私が千里眼だからとか、組長の娘同然だからということではなく、私が若い女の子だから気を使わずにはいられないという感じだった。

「やっぱり女の子がいると違うなあ。組の中が綺麗になるし、なんたって華やかになる」

みんな、そんな事を言ってくれた。

どちらかと言えば地味な私に何処まで華があるかは分からないけど、組を綺麗にしておきたいのは確かだ。神社にいた時は「清める」って事は、何より重要な事だった。見た目もすがすがしいし、心もあらたまる。そういう感覚は私の一部になってしまっているのだ。

今までは養父以外の人からは、気味悪がられるか、地味と思われるかがほとんどだった私が、ここでは明るくて華やかだと言われる。もう、これだけで私は気分がいい。

可愛がってもらえるって、嬉しい事だな。ここの人たちのためなら、なんだってやろうって気になれる。やっぱりここはあったかい場所だ。

そのうち私は家事の手伝いだけではなく、組の役に立つことは無いかと思い始めた。

組長が私を好奇心が強いと言ったのは当たりだった。以前の怖い思いはどこへやら、自分の力を使えば何か出来るんじゃないかと考えるようになっていた。

そして、組には実際に厄介事が起こるものなのだ、真柴組はその頃、頻繁に麗愛会にちょっかいを出されるようになっていた。店に麗愛会の人間が来たと言っては、組員が「話をつけてきます」と言って出かける事が増えてきた。

実際に「話し」だけで済んではいないことはすぐに分かった。組員の出かける時の緊張感が違う。結構な生傷を抱えて帰る組員もいたし。

それに、孝之さんの呼ばれる機会が増えた。どうも彼は腕っ節の強い人らしく、組にとっては切り札的な存在のようだ。決して歳若い人じゃないのに、こういう時に信頼されているのがみんなの様子で伝わった。

孝之さんについていれば、私も組の役に立つチャンスを得られるかも。私はそう考えて、なるべく孝之さんの様子をうかがうようになった。

そしてそれは正解だった。ある日、孝之さんに買い物に付き合ってもらい、荷物を運んでもらっていたら、
「御子ちゃん、ちょっと隠れて」
と言われて、二人で止まっている車の陰に身を隠した。

いかにも柄の悪そうな男と、そうでもないが目つきが嫌に鋭い男が目の前を通る。

「いや、すいません。あいつらにちょっと目をつけられてるんで。厄介な事になるとまずいんで隠れてもらいました」
「何かあるの？」
「あるって訳じゃないんですが、あいつら麗愛会の奴なんです。麗愛会は他の同じくらいの規模の古くからの組織と、ずっと勢力争いをしているんです。喧嘩沙汰も多くて、怪我人や逮捕者も随分出ています。だからその組織のシマの周辺をうろついている事が多くて、こんな時間にここいらを歩く事なんてなかったんですが」
「孝之さんが危ないなら、私の雑用に使ったら悪いわね。ごめんなさい。私、知らなくて」
「知らなくていいんですよ。こんな物騒なこと。それにしてもあいつらが何考えているのか分かればなあ。なんだってこんな所をウロウロしているんだろう？」

孝之さんは心配そうな顔をした。

11

その数日後、私はその二人組をまた、買い物帰りに見かけてしまった。

『あいつらが何考えているのか分かればなあ』孝之さんの言葉を思い出す。

私は彼らに少し近づき、目の鋭い男の方の心を探った。心が読めるギリギリくらいの距離だ。

（やはり固い、いいシマを持ってやがるな。真柴は）

あ、やっぱりウチを意識してるんだ。

（華風との抗争もこうも力が拮抗しては消耗戦だからな。あっちにばかり力を注ぐより真柴を狙った方が、効率がいいかもしれない）

ええ？　ウチを狙う？　狙うって、何かされるのかしら？

その時男の視線が自分に向いて、私は慌てて下を向いた。そのまま靴ひもを直すふりをして、男の視線がそれると、さっさと歩きだした。しばらくしてから振り返ったが、男達の姿は無い。

私は急いで組に戻り、孝之さんを捕まえた。

「大変大変。あのね、さっき麗愛会の奴等がいて、目つきの悪い方の心を覗いたらね」

「誰の心を覗いたって？」

その声にぎくりとする。私の後ろには組長がいたのだ。
「御子、誰の心を覗いたのかと聞いているんだ」
じろりと睨まれて私はおずおずと答えた。
「麗愛会の男です。前に、買い物の途中で見かけた事があって」
組長はむっつりしたまま私に言った。
「御子、来なさい」
抵抗できる雰囲気じゃない。私は黙ってついて行く。組長は私を自室に入れ、正座をさせる。
「お前が心を読む事を、養父はよく思っていなかった。私もよく思っていない。人の心は覗いてはいけないもの。私がそう考えている事を知っているな？」
「はい」
「まして私は言った。組の事に首を突っ込むなと。お前はまだ懲りないのか？」
「でも、私、組の役に立ちたいんです。この力を使って」
「そんなものは無用だ。お前はここの組員じゃない。こんな事に力を使うなんてもってのほかだ」
「なぜそこまで人の心を覗いちゃいけないの？全部を見るんじゃないわ。みんなの役に立つ所を少しだけ見たいだけなのに」
組長は悲しげな顔でため息をついた。
「今に分かる。少しと思っても人の欲求はそう簡単に割り切れるものじゃない。その力は使わないに越したことは無いんだ」
組長はさらにため息をついた。だが、私に問いかけて来る。

「それで、麗愛会の奴は何を考えていたんだ？」

結局聞くんじゃない。そう、思いながらも組が心配で私は素直に答える。

「華風との抗争が消耗戦だから、ウチを狙った方が効率がいいって」

「そうか。だが、心配はいらない。ウチの奴に手を出させたりはしない。安心しなさい。それより安易に人の心を覗くな。必ず辛い目に合う日が来る」

組長は悲しい目のまま言った。

二年生に進級した時、クラス替えがあった。そして、クラスの女子生徒は騒然となった。

学年で一番、カッコいいと言われる男子生徒がそのクラスにいたからだ。

その彼と授業の課題で私は同じ班になった。地域の産業について調べ、班ごとに発表すると言う課題で、発表役は勿論彼だ。私は一番地味な図書室での調べ物の担当を受けもった。

ところが彼が頻繁に私を手伝ってくれた。一番のメインの発表会で彼は責任を負わされるんだから、こういう地味な仕事に時間を割かなくていいと言ったのだが、彼はかまわず資料作りを手伝ってくれた。二人で一緒の時間が増える。と、同時に噂もたってしまった。

彼が私に気があるらしいと、いろんなところでささやかれていた。好奇心や嫉妬、やっかみなどがこそこそと飛び交う。

こういう子と噂が立って気にならない訳がなかった。悪い気もしない。当然私も意識し始める。

それまでの私なら、きっと余計な期待は抱かなかった。何より自信もなかったし。

しかし、組のみんなに可愛がられて、私はささやかな自信を持つようになっていた。ちょっとした事で印象が違うんじゃないかと、髪型を変えてみたり、しぐさに気を使って見たりするようになる。

こんな時は甘い空想とまさかという思いが交錯する。たぶん、ここまでは誰もが同じ思いに駆られるのだろう。ただ、私は誰もと同じじゃなかった。彼の心を読めるのだ。

自分が何らかの期待を持って人の心を読んでも、大抵失望する。ロクなことにはならない。今までもそれは十分学んでいたはずだった。でも、恋は盲目。ほんのちょっとだけなら、そんなにひどいことは無いんじゃないかと勝手に自分の心を納得させてしまう。要は誘惑に負けたのだ。

結果は最悪だった。ただの勘違いならまだ良かった。

私はその筋の関係者で、おまけに勘がいいらしいから、目立ちがちな自分に悪印象を持たれないように先手を打って好印象を植え付けて置こうと彼は思ったらしい。

それでもまだ許せたが、彼の偏見はひどすぎた。組には若い男性も多いので、私はとっくにそういう相手といろいろ経験済みで、か

なりのすれっからしに思われていた。だから逆に平気で近づく事も出来たのだ。こういう軽蔑のされ方は初めてだったので、かなりグッサリときた。

私は彼が直せずにいる癖の、鼻毛を抜く瞬間のまぬけ顔をこっそり写真に撮り、彼の片思いの娘の机に放りこんだ。そして彼には二度と口も聞かず、近寄りもしなかった。

12

私はしばらく落ち込んだ。例の彼の事もあったが、それ以上に自分の弱さを痛感させられた。

組長の言うとおりだった。私は誘惑に負け、自分の欲深さを思い知った。

ほんのちょっとなんて事は欲求の前では通用しなかった。わずかに使えば、もっと知りたくなる。この力はそういうものなのだ。自分の都合の良いところだけを見て、満足する事が出来るほど、人はおめでたくできてはいない。私はそれが分かっていなかった。

それでも私がこの力を全く使わないと言う訳ではなかった。これは危険回避にはとても便利な力だ。

以前、ナイフをよけてからというものの、私は自分の近くにいる人のとっさの行動が読めるようになっていた。おかげで誰かが怪我をしそうな時や、自分が転びそうな時など、事が起こる前にピンとくる。こういう時にはほとんど無意識のうちに使ってしまう。

もうちょっとこまかいところでは、どのレジに並べば早く清算が終わるとか、どこまでなら値切れそうだとか、どんな事を褒めればこの人は協力してくれるとか、そんな小ずるい事も覚え始めた。それからちょっとしたいたずらなんかも。ただ、組長にバレると、きっちりお説教を食らうけど。

それでもそうやって力とうまく付き合ううちに、落ち込んだ気分は解消されてしまった。

三年生になり、進路だ受験だと周りが騒がしくなってきた。私は別に進学したいとは思っていなかった。一緒に学校に行きたいと思うほどの友人もいなかったし、進学して目指したいと思う職業もない。　さっさと組を手伝える立場になりたいのが本音だったが、組長が許してくれるはずもなかった。迷惑をかけたくない一心で、あまり費用のかかりそうのない学校を受験先にした。

組長は私でなくても未成年を組員にする事は無かった。高校を出て十八でここの門をたたいても、組長の知人や、シマの店の関係先に住み込み仕事を紹介して、追い返した。

そういう人は大抵施設上りで、自分と同じ施設にいたここの組員を頼って来るのだが、そのまま仕事が合えば、それでよし。合わなければ組長が職場と本人を説得し、それでもどうしてもとなると、初めてウチへの組入りが許可される。

でも、そこまでやっても、トラブルはついて回る。生まれてほぼすぐに子を手放したような親なのに、いざ、我が子がこういう世界に入るとなると、顔色を変えて連れ戻しに来たりするのだ。

特に母親が「何としてでも」と、腹を据えた時は物凄いものがある。誰にも何にも言わせない迫力があり、そこに信頼を取り戻して、家に帰る場合もある。

父親だと、信頼があったのに何かの事情で横道にそれた者が、家に帰ったりする。母親があきらめていたり、疎遠だった父親が急に出てきても大抵上手くはいかない。そういう時は世間体から迎えに来ているだけで、話し合っても平行線になり、結局は組に残る事になる。

だから組の門をたたき、本当に組員になるのは年に一人いるかいないか。そして、数年に一人くらい連れ戻されて堅気に戻っていったりする。だから組員の数はあまり増えもしなければ、減りもしない。　ここがいつまでも小さな組なのは、こんな事情もあるようだ。

そんな組では新しい組員を一人迎え入れた。良平さんだ。まだハタチになったばかり。

良平さんの父親もこっちの世界の人で、母親は幼い時に亡くなっている。父親も喧嘩で殺され、高校は施設から通ったそうだ。卒業後仕事に着いたが父親の事で後ろ指ささされ、一年ほどで真柴の門をたたいた。生前父親に「どうしようもなくなったら、ここを訪ねるように」と言われていたのが真柴だった。どうやら組長と彼の父親は知り合いだったようだ。

それでも組長は「未成年者は受け入れない」といい、良平さんは元の職場に戻ったが、あまりにいやがらせがひどく、ハタチの誕生日を迎えると再びここの門をたたき、受け入れられた。

そういう事情を聞くと、もっと陰のある人かと思ったけど、良平さんにそういう感じは見受けられない。凛としたところはあるけど、どんよりとした暗さは感じられなかった。

むしろ彼は私のイタズラ仲間になってくれた。

先に良平さんにイタズラをしたのは私だった。新しく入ってきた人への挨拶代わりだった。

彼がお茶を飲もうと考えると、必ず何かを隠した。勿論心を読んでいるので、ギリギリまでしかけない。彼がまさしくお茶を入れようとすると何かが無くなる。彼の湯飲みだったり、急須だったり、お茶っ葉だったり。勿論私は知らん顔で元の場所に戻す。

でも、さすがに食事時のやかんを隠そうとしたのはバレてしまった。

「コラ、このいたずらっ子が」

良平さんは私を捕まえて睨んで見せたが、その目が完全に笑っている。

「良平さん、迫力ないよ。ここでこんなんじゃ、これから困るんじゃない？」

私も叱られている気がしなくて、笑いながらそう言った。

「そうなんだよなあ。どうやったら迫力出せるんだか。睨んだら御子ちゃんの方が迫力あるんじゃないか？」

「女の子にひどーい。迫力なんてないよお」

「いや、今は女の子の方が強いから。きっと御子ちゃんも迫力ある。睨んでごらん？」

「そんなことしません！」

私達は笑い転げると、孝之さんに同じイタズラを仕掛けた。今度は二人掛かりだからタチが悪い。ついにやかん隠しにも成功し、他の組員達を次々と狙った。

組員達はいたずらされては困った顔をしたり、笑ったり、ちょっとばかりの小言を言ったりした。

そして組長にイタズラがバレた私は、きっちりとお説教された。
たぶん、良平さんも。

13

こんな良平さんだったから組になれるのにもあっという間で、たいして日も経たない内に彼はみんなの中になじんでしまった。

ここは人を受け入れやすいところだと思うけど、それにしても彼は早くに受け入れられた気がする。きっと本来は人に好かれる人なんだろう。

何故こんな人が職場で疎まれたんだろうと、素朴な疑問を彼にぶつけてみると、

「しかたがないんです。俺の親父はこっちの世界の人間だし、俺の周りは親父の知り合いの同じ世界の人間ばかり。普通の奴らじゃ避けたくもなる」

「だって、それって親の事じゃない。良平さんには関係ないのに」

「いや、それだけじゃない。その上俺も高校の時、喧嘩沙汰を起こしてるから。それで雇ってくれるところが他になかったのに、そこで職場のウマが合わなかった。色々ツキもないんだ、俺」

私はため息をついた。

「ここに来る人ってみんなそうだね。そんなに悪い人じゃないのに、ツキがなくて誤解を受けた人ばっかり」

「そういう御子ちゃんも、そうですよね？　色々聞きました。ここは不思議な所だ。俺、ここでこんなに受け入れてもらえるとは思いませんでした。正直不安だったのに。誰もが当たり前の顔して、俺を受け入れてくれる。ありがたいです」

うん。本当にそうだ。ここって不思議なところ。ここに来た人は

みんな家族の様になってしまう。

ある日良平さんを囲んで、若い組員達が騒いでいた。何かと思って聞いてみると、

「いや、コイツ一番年少のくせに、生意気にも堅気の彼女がいるんですよ。どうりで休みのたびに姿が見えなくなる訳だ」

そう言ってツーショットの写真を見せてくれる。へえ。結構な美人。綺麗な人だなあ。

良平さんは質問攻めに合っている。何処で知り合ったのか？　付き合いは長いのか？　と。

「高校の時、隣のクラスだったんです。卒業前にダメモトで誘ったらいい返事もらえて、それからの付き合いですから、二年以上になります」

「卒業前か。そりゃ、焦るよなあ。こんな美人が相手じゃ、すぐ他の男に取られる」

「コイツ顔はまずくないから。他は全然追いつかないが。畜生。上手い事やってやがる」

皆にワイワイと騒がれながらも、良平さんもまんざらじゃなさそうな顔してる。照れ臭そうにしながらもどこか自慢げだ。

「でも、こんな稼業になっちまって、彼女、怒ってんじゃないのか？　大丈夫なのかよ？」

こう言われて良平さんの顔が曇った。

「そりゃあ、いい顔はしてくれません。でも、俺の親父の事も、喧

嘩沙汰起こした事も、承知の上で付き合ってくれたんです。前の仕事場での事情も分かってくれてるし。今度もちゃんと分かってくれてます」

良平さんはそう言ったが、場の空気が変わって、聞いた組員の方も気まずそうな顔をした。

「悪かったな。変な事聞いて」

「大丈夫です。それに俺、自信、ありますから」

良平さんがまた、ニヤけて言う。

みんな、自信過剰だの、羨ましいだのと良平さんを小突いている。確かに私も羨ましかった。恋人がいる事がではなく、ごく普通の堅気の人に、信頼されている自信を持っている事が、無性に羨ましかったのだ。きっとここにいるみんなもそう思っているに違いなかった。

でも、私にもそんな信頼の目を向けてもらえている事が分かった。夏休みが終わってすぐ、学校で親しくしている清美が私と同じ高校に進路を決めたと言ってきた。

「え？　私なんかと同じところじゃなくてもいいのに。近くの私立に今の成績でちょうど入りやすいところがあるって言ってたじゃない？」

私は組の雑用も手伝いたいし、付き合う娘に迷惑がかかっても嫌なので友人とは学校以外では会わず、放課後の付き合いなどもしないようにしていた、だから清美にはもっと親しい人はたくさんいるはずなのだ。そういう娘が近くの私立に一緒に通ってくれるはず。

「へへ。ホントはね、別の目的もあるんだ。私と同じクラブの二組の奈津美のお兄ちゃん、前から気になってたんだけど、御子が希望してる高校に通ってるの。高校生だし彼女いるかと思ってたけど、意外と口下手らしくって、まだ、彼女っていないらしいんだ。だから思い切って志望校変えちゃった。上手くいって付き合えれば最高だし、最悪振られても御子がいるしね」

「私、保険？」

私は笑ってしまった。

「うん、でもね。御子が思ってるより、大事な保険だよ。御子、自分が人に好かれないって思ってるみたいだけど、そんなことないよ。御子の家のことだって、気にしない人は気にしないよ。御子って一見とっつきにくそうだけど親しくなればそうでもないし、気になることははっきり聞いてくれるし、こっちが聞きたい事もちゃんと答えてくれるでしょ？なんか、分かろうとしてくれてるなって思えて、安心するんだ。私、御子と卒業したらそれっきりなんて寂しいから」

「寂しい？」

「うん。すごく寂しい。だから私、もし振られても絶対御子と同じ高校行くからね。必ず二人で合格しようね」

清美はそう言ってくれたのだ。

14

私はがぜんやる気が出た。本気で高校に行きたいと思った。正直私は進学には迷っていた。最近組の懐事情が悪化している気がしたのだ。

それはきっと麗愛会がウチのシマを荒らしているせいに違いなかった。見回りに行った組員が生傷を追って帰ってくるようになったし、時には病院に行くほどの傷も負っている。

孝之さんは新米の良平さんにドスって言う短刀の使い方を教え始め、二人で庭先で練習するようになった。私は彼らのそういう姿を見ると、以前、ナイフを使っていた麗愛会のチンピラ風の男を思い出すのでいい気はしない。その時はなるべく庭を見ないようにしていた。

それでも狭い場所なので声は聞こえてしまう。どうも良平さんはこういう事に向いているらしく、孝之さんは盛んに褒めていた。

「きっと親父さんの血筋だろう。あんたの親父さんはドスの喧嘩が得意だったと聞いているから」

その、お父さんのせいで、巡り巡って良平さんはここに来ちゃたのよね。そして、お父さんと同じ短刀を持って、あの、チンピラたちみたいに喧嘩をするんだわ。そして、そういう事をして守ったシマから受取ったお金で私は進学させてもらおうとしているんだ。

私はとても複雑で、進学はしなくていいと組長に言ったが、一言で却下され、話も聞いてもらえなかった。当然、女将さんは組長に

賛成だ。

私は年配の孝之さんと、一番若い良平さんの両方に相談した。

「たしかに俺達の稼ぎはいい金とは言えないが、行かせてもらえるなら進学はした方がいいです。高校生活は大事だから」

やはり孝之さんもそう言った。

「でも、高校って普通のところじゃなくても、定時制とか、通信制とか、独学すれば学校行かなくても試験だけ受けて資格が取れる方法もあるみたいじゃない？　そうすれば組も手伝えるし仕事もできる。無理に高校に通うよりずっと安上がりに済まない？」

「学校は勉強を習うだけのところじゃありませんよ。御子ちゃんの年じゃまだまだ視野が狭いから、小さな世界に閉じこもっちゃだめだ。高校は未成年者が大人に守ってもらいながら、いろんな人と出会ったりいろんな事を知る大事な場所なんです。大体仕事と言ってもここから通わせてもらえる仕事なんてないでしょう？　組長が御子ちゃんをここから出すとは思えないし」

言われてみればそうだ。中学を出たばかりの未成年者が、こういう所から通いたいと言って雇ってくれる職場があるとは思えない。下手をすれば職場に迷惑もかけかねないだろう。それに何と言っても保護者の許可もいるだろうし。組長は絶対許可なんかしてくれない。

良平さんも、

「高校は行った方がいいだろうな。同世代の堅気の事を知る大事な場所だし、いろんな奴等に会える。俺も学校に行っていたから、今の彼女と出会えたんだし」と言った。

その時点では、受験も仕方なく受け入れなくてはならないことだと思っていたが、一緒に通いたいと言ってくれる娘がいるだけで、私は一気に真剣になった。こんな風に行ってくれる清美のために、絶対に合格したい。高校に行ったら、こんな風な人との出会いがもっとあるかもしれない。

ここは組長に甘えさせてもらって、高校に通おう。少しでも負担を減らせるように、変な後ろ指を指されないように、出来るだけいい成績を収めよう。でないと組が学校を脅しただの手をまわしただのと言いだす人が出るだろうから。

こうして私の生活は受験勉強一色になった。掃除や洗濯も最低限にとどめ、時間が取れれば図書館にも通った。

でも、組の状況は悪化する一方のようだった。みんな私には気を使って何にも言わずにいたけれど、女将さんが事務所から帳簿の様なものを持ち出してはため息をつきながら組長の部屋に入っていったり、組長も眉間にしわを寄せて難しい顔をする事が増えた。

孝之さんと良平さんが呼びだされる事も増えてきた。きっと麗愛会の嫌がらせが悪化しているに違いない。たとえ二人が追い払っても、こんなに喧嘩沙汰が頻繁に起こっては、お店に影響があるに違いなかった。それでも二人が喧嘩に出るのは、きちんと守り切ってウチの組を信頼してもらうためだろう。　組長がそうそう表に出る訳にはいかない。うっかりすればかえって麗愛会を刺激してしまう。だから、今や二人はこの組にとって欠かせない存在となってしまっていた。

それでもどうにか組は年を越し、正月もすぎて私の受験も押し迫ってきた。

その日、私は学校の委員の仕事を後輩に引き継ぐためのこまごまとした雑用で帰る時間が遅くなってしまった。来月になれば早いところは入試が始まる。入試を終えれば卒業式まであっという間らしいので、三年生はこういう雑用を今のうちに終わらせる必要があった。でも、冬の短い日は、すぐにも暮れようとしている。

暗くならない内に帰らないと、みんなに心配をかける。私は途中にある公園を突っ切ってしまう事にした。ちょっと行儀は悪いけど公園の柵を乗り越えて、木陰から走りだそうとした。

その時、聞き覚えのある声が耳に入った。思わず足を止める。

「無理だ。今、俺が組を抜けたら間違いなく真柴は麗愛会にいいようにされるだろう。それに、今更俺、足を洗えない」

そこには良平さんと前に見た写真の彼女がいた。何か深刻な話の様だ。

「でも、事情が変わったのよ。私だけのことならかまわないわ。良君がどうしてもと選んだ道に文句は言えない。だけどお父さんが倒れた今は、家族に心配かけたくないの」

15

「俺だって好きでこんな世界に入った訳じゃない。でも、他に行くところがなかったんだ。お前、分かってくれてると思ったのに」

良平さんがすねたような口調で言う。こんな言い方、きっと彼女にしかしないんだろう。

「分かってるわよ。でも、ウチだって大変なの。お父さんの手術もあるし、お母さんだって身体が強い方じゃない。二人とも良君との事は大反対してたし、お父さんが倒れたのも心労があったかもしれないじゃない」

「俺のせいかよ」

「そんな言い方しないでよ。ただ、今は親に心配かけたくないの。お父さんだって完全に治るか分からないし、弟の学費もかかる。妹だっている。この上私の事で苦しめたくないのよ」

「でも、俺だってほかにどうしようもなくて、今のところに来たんだ。そして今は組で必要とされてる。組も今大変な時なんだ。絶対足なんか洗えない」

「どうしようもないんじゃないわ。私には分かる。良君、今のところが気に入ってるのよ。きっと、私よりも大事なのよ」

「そんなの比べられっこないだろう？　それならお前だって俺と家族と比べてみろよ。ホントはお前、俺より家族の方が大事になってるんじゃないのか？」

きっと良平さんは、売り言葉に買い言葉でそう言ったんだと思う。彼女に、「そんなことない」と言ってほしかったんだと思う。私もそう言ってほしいと思った。でも、彼女は口を開かなかった。

無言の彼女を見て、良平さんは怒ったように彼女の肩をつかんだ。そして。

え、ええー？　こ、ここで強引にキス、しちゃったよー！

ど、どうしよう。こんなところにいちゃまずい。絶対まずい。私はうろたえた。

完全に頭の中が空っぽだった。ここから逃げることしか考えてなかった。

ところがこういう無防備な時の私は、どうしようもなく不器用になるようだ。普段『力』を使っているバチが当たるのか、千里眼なんて持ってしまった分、ツキというツキに見放されるのか、私はスカートの裾を近くの低木にひっかけて、無様な音を立ててひっくり返った。

二人は驚いて離れ、私の方を見た。私はまともに倒れて全身を地面にたたきつけたのだが、痛みなんて感じなかった。穴があったら入りたいとはこのことだろう。ましてや声も出なかった。

最初に動いたのは彼女だった。私の方に来て、「大丈夫？」と声をかけて立たせてくれた。

彼女が一番冷静だった。何だか冷静すぎるくらいだった。そして良平さんに「知ってる子？」と聞いた。良平さんは呆然としながらも頷いた。すると、初めて悲しそうな顔を見せて、

「そう。もうウチに電話はしないで。お母さんが心配するから」

そう言って駆け出して行ってしまう。

私は思わず言った。

「良平さん。追いかけなきゃ！　私も謝るから。　さっきの言葉、本気じゃないんでしょう？」

良平さんはぼんやりしていたけど、私の言葉を聞いてはっとした様だ。

「聞いてたのか？」

あ、そうか。立ち聞きまでバレちゃった。どっち道バレたとは思うけど。

「彼女さん、良平さんがあんな事言ったから驚いて返事できなかっただけだよ。良平さんだってあんな事言う気じゃなかったんでしょ？」

私がそう言った時だった。

良平さんが物凄い目で睨んだ。人にこんな目で睨まれたのは初めてだ。

「お前……俺達の心を覗いたのか？」

思いがけない言葉に私は横に首をブンブンと振った。怖くて声が出てこない。

いや、ダメだわ。ここはちゃんと説明しなきゃ。良平さんはウチ

の組員。私は決して組員の、家族同様に暮らす人たちの心を覗いたりはしないって、分かってもらわなくっちゃ。そうじゃないと、私は大事な家を失っちゃう。大事な家族に信用してもらえなくなる。それだけはいやだ。

「私ね。前の家族の心を覗いて、そこにいられなくなったの。好きな男の子の心を覗いて、すっごく後悔した事もある。だから、絶対にこういう時に心を覗いたりなんかしない。お願い、信じて」

ありったけの真剣さで良平さんにそう言う。信じてもらえるだろうか？

すると、ようやく良平さんの視線が緩んだ。と、言うか、むしろ優しくなった気がする。

「そうだな。千里眼の性質を考えれば、そんなに喜んで心を覗いたりする訳ないんだな。悪い、こっちもカッカしてたから」

悪いなんて言われたらこっちの方が絶対悪い。立ち聞きしてた上に、覗いてたんだから。

「彼女さん、追いかけなくて良かったの？」

こんな事態にしたのは私なんだけど。

「いいんだよ。気持ちは伝えたんだから。あとは、彼女次第だ」

良平さんはそう言った。

そうか。良平さんは彼女に言葉じゃうまく伝えられない事を、必死で伝えようとしていたんだ。その真っ最中に……ああ、最悪。

私は良平さんに何度も謝った。良平さんはそのたびに「もう、いいよ」と言った。

なんだか彼女の事で、私どころじゃなくなっているような感じだった。

その日から良平さんは目に見えて元気が無くなった。それでも見回りの組員から呼びだされると、孝之さんと一緒に出掛けて行った。私は良平さんが、何か、ヤケになんなきゃいいけどと、思っていた。

16

そして、その日の朝が来てしまった。その前日にいつも顔を出す組員の何人かが姿を現さなかった。

私が気になるくらいだから、他の人達はもっと気になったのだろう。朝食の後、朝の報告の席で、事務所で組長にどういう事なのかと皆が詰め寄った様だ。

そのせいかいつもの報告よりも、皆、長く事務所にとどまって、なかなか出てこなかった。時折大声でどなる声も聞こえる。何か殺伐としたやり取りがあったのは間違いなかった。

みんなが事務所を出てきても、誰も何があったかは教えてくれない。

それでも一晩中見回りをしたり働いたりしていた人たちは、疲れた体を休めに部屋に戻ったし、これから仕事がある人はいつも通りに出て行った。

そうなると組の雰囲気も落ち着きを取り戻し、私も気になりながらも学校へと向かう。

授業を終えて帰宅すると、組の雰囲気はすっかりいつも通りだった。私は孝之さんに今朝、何があったのかと尋ねたが、良平さんを中心に若い組員達が組長に意見したので騒がしくなっただけだといい、それ以上の事は教えてくれない。

私はあれ以来バツが悪くて良平さんと口を利いてはいなかった。

だから組長にどんな不満があったのかは分からない。でも、先輩たちを差し置いて良平さんが組長に意見するなんて、ただ事とは思えなかった。

けれども組長が私に組の仕事に関しては一切知らせないようにと常日頃言っているから、これ以上の事を教えてもらえないのも分かっている。

いっそ誰かの心を覗いてみようか？　一瞬、そんな考えが頭に浮かぶ。だけどすぐに思い出した。良平さんがあの日に見せた物凄い目つき。ダメだ。とても覗けない。

良平さんも組に来て、いつの間にか変わっていた。睨んでも迫力がないと笑いあっていたのは、つい、この間の事だったのに。

実はあの朝、良平さん達はウチの中堅で腕に覚えのある組員が、借金と家族の安全をネタに何人も麗愛会に引きぬかれた事を知らされたのだ。麗愛会はいくら喧嘩を仕掛けても食い下がるウチにたいして業を煮やし、ウチを内側から切り崩す事にしたようだ。

ウチは規模が小さい分、事情のある者で固まっているので結束は強い。だが、それだけに人のつながりを断ち切られると大きく痛手を被ってしまう。そこを狙われたのだ。

こんな事を繰り返されたら、ウチは間違いなく崩壊に追い込まれる。しかも麗愛会は容赦がないので有名だ。義理や仁義がどこまで通用するか分からない。連れて行かれた組員達も心配だ。

こうなったら殴りこんででも組員達を取り戻し、これ以上、組に

手出しをされないようにしたい。

良平さん達若い組員は、そう、いきり立ってしまったのだ。

だが、勢いだけで乗り込んでもおそらくは勝ち目がない。相手の懐では当然こっちの分が悪い。引き抜かれた組員達も人質に使われるだろう。それに麗愛会は銃のルートに詳しい事も問題だ。なんの策もなく飛び込んでいくのはあまりに無謀だった。

ウチも今まで全く手をこまねいていた訳ではなかったらしく、麗愛会の事はかなり詳細に調べていた。

ここは発足したての新興勢力で、内部はまだ不安定。遊技場や闇金を牛耳る事でのし上がってきた連中と、街の暴走族や裏情報をあてにする企業とのつながりや詐欺を利用する人脈に長けた連中との間に、常にひずみを抱えていた。闇金がらみの借金で、組員を引っ張って行った今回のやり方はおそらく前者のグループで、人脈グループの出方はまだ分からない。

もし、この二派の対立が大きいものなら、ウチはそこにつけいる隙がある。そこがはっきりするまでは、引っ張られたウチの組員にはつらいだろうが、しばらく耐えてもらってチャンスを待った方がいいと言う結論に至った。誰もが組員達の身を案じていたのだが、今、強引な真似をして組が全滅してしまっては意味がない。そして、そこまでしようとも、金の問題はどうしようもない。借金をチャラにする事は出来ないのだ。

しかしそれでは連れて行かれた組員達の、身の安全は保障されない。若い組員達はそこを心配し、組長に突っかかった。特に良平さんは組長に強く意見したらしい。時を置けばかえって相手に次の策

を練る猶予を与えかねない。むしろ急襲をかけた方がいいと突っ張った。だが、勿論そんな無茶を組長が許すはずもなく、勝手な真似をしたものは組を追い出すと言って、話を打ち切ったそうだ。

本来なら一番の若年者の良平さんが組長に意見をするなんて、とんでもないことのはずだった。良平さんもいつもだったらそんな礼儀知らずな真似などしない人だ。組長も驚いたらしい。

若さからカッとなって、そんな言葉が出たのだろうと組長達は思ったようだ。だから、朝の内は若い組員達が黙って無茶をしないように、みんな気をつけて様子をうかがっていたのだが、時間と共に落ち着きを取り戻したようなので、夕方頃には自分たちの仕事に忙殺されたり、身体を休めたりで、組の雰囲気はすっかりいつもの物に戻っていた。勿論私には何も知らされず、不安は感じても目前に迫った受験を無視する事も出来ず、いつも通りの勉強を始めていた。

その時にはすでに、良平さんは単独行動に出ていたのだろう。わずかな隙をつき、組を抜け出し、たった一本のドスだけを懐に忍ばせ、一人麗愛会の本部へと足を運んでいたらしい。

私達がその事を知ったのはすべてが終わった後だった。良平さんが運ばれた病院で、命の瀬戸際をさまよう手術が行われている時に、その手術室の前でようやく何があったのかを聞かされた。本部に連れ去られていた組員が、その、一部始終を見ていたのだ。

17

良平さんは、堂々と正面切って本部に乗り込んだらしい。あまりにも当たり前の顔をして、当然のように胸を張って建物の中を闊歩して来たそうだ。

まだハタチの男の子が、突然こんな真似をしたら周りはさぞ、驚いたに違いない。しかも良平さんには全く殺気がなかったそうだ。むしろ、殺してくれと言わんばかりの無防備ぶりだったと言う。

誰もがあっけに取られてその姿を見送っていたが、良平さんが会長室の前に来ると、さすがに慌てて捕まえようと、皆が一斉に襲い掛かった。

ところがここで良平さんの姿は、かき消すように消えてしまった。そして、会長室の中に一瞬姿を現すと、風のように駆け抜けて、麗愛会の会長の前に机を挟み向き合ったそうだ。

「ウチの組員を返して頂きに上がりました」

良平さんがそういうと、

「そう言われて返すと思うか？　断ったらどうするつもりだ？」

と、会長は聞き返した。

「あなたを刺します」

良平さんはそう言ってドスを抜いた。会長の横にいる男が前に出たが会長はそれを制した。

「それは出来まい。大勢の組員がお前を狙っている。その刃が届く前にお前は捕まるだろう」
「捕まっても、のがれて刺します」
「その前にお前が刺される」
「刺されても、あなただけは刺します」

会長は面白そうに笑い、
「死ぬ気で刺すか。鉄砲玉は皆、そういうものだ。しかしほとんどは外れるものだ。ここには銃を持った者もいる。脅しではない。撃ち殺されてはさすがに刺せないだろう？　度胸は買うが、考えが甘いな」
「撃たれても刺します。俺が死んでも誰かが刺します。ウチの組の人間かもしれないし、ひょっとしたら、ここの人間かもしれない。あなたもその椅子に、安心して座っている訳じゃなさそうだ。実は俺があんたを刺すのを楽しみにしている奴が、ここにもいるんじゃないですか？」

その時部屋に銃声が響いた。良平さんは素早く身体を机に隠したが、足に銃弾を受けてしまった。そのすねから大量の血が流れ落ちる。もう彼は動けないだろうと誰もが思った。

「おしゃべりがすぎたな。足で済んだのを有り難く思え。会長、コイツ、どうしますか？」

銃で撃った男がそういいながら良平さんに近づき、つかみかかろうとした。その時、良平さんがドスで男に斬りかかり、その隙に銃を奪う。そして撃たれた直後とは思えないような身のこなしで会長に飛び付き、その首元にドスをあてがった。誰もが息をのむほどの、

すさまじい目をしたと言う。

「俺を甘く見ないでください。俺、ここに死にに来てるんですから。そいつもあんたの首を狙ってるかも知れませんね。よほど俺に吹き込まれたくないらしい。どうです？　取引をしませんか？」

「取引？」

会長が目を丸める。

「今後真柴に手を出さないなら、真柴はあんたの命を必ず守ります。外の敵からは勿論、中の敵も含めて。ウチの連中は絶対に裏切りませんよ。俺が命と引き換えにした約束を、裏切れるような奴らじゃない。あんたもそれは知ってるでしょう？　真柴を甘く見ない方がいいですよ。組員の命を取られたりすると、しつこいんです、ウチは。俺みたいなバカがすぐに出て来る」

「分かった。守ってもらおう。今、救急車を呼んでやる」

会長がそう言って受話器を取った。

「会長！　こんな奴のいう事、聞くんですか？」

銃を奪われた男はそう言ったが、

「真柴はウチの事をトコトン調べあげているようだ。コイツのいう事は本当だろう。真柴を切り崩したかったが、切り崩されそうなのはウチの方だ。私はお前よりは、この坊主の方が信用できる」

そう言って会長は救急車を手配した。

「それで、その場にいた私が組長への伝言を頼まれました。良平との取引は成立したから、ウチに手出しはしない。だが、組員達は金

の事が綺麗にならなければ返す事が出来ない。その連中には会長の命を守ってもらう。借金を返せそうな者だけ、連れ帰っていいと」

命と引き換えに。ああ、やっぱり良平さんはヤケを起こしていた。まるっきり死ぬつもりで一人で無茶をしたんだ。

「いくら若いとはいえ、こんな無茶をするとは。何かあったんだろうか？」

組長が頭を抱える。

あったなんてもんじゃない。きっとあれから彼女とうまくいかなかったんだ。良平さんに家族はいないから、彼女を失い、組を失ってしまったら何にもなくなっちゃうもの。

「私のせいかもしれない」

私はつい、そう言ってしまった。

「何か知ってるのか？」

組長がすぐに聞いた。

「良平さんが彼女と口論している所を立ち聞きしちゃって。私、話の腰を折っちゃったみたいなの。あの時私がいなかったら、仲直りしたかもしれないのに」

実際は話の腰どころじゃなかった。あんな事がなければ、良平さんもヤケを起こしたりはしなかったのかも。

「そういう事は他人には関係がないものだ。お前のせいではないことは確かだから、気にしなくていい。仲直り出来る時は、何があってもできるものだ」

組長はそう言って、私の頭に手を置く。

すると、突然看護師の人が現れて組長に「ご家族の方ですか？お話が」と、声をかけてきた。

「彼に家族はいないので、私が後見人代わりです。お話ならうかがいます」

「そうですか。では、こちらに」

そう言って看護師は組長を別室に連れて行ってしまった。なんの話があるんだろう？

18

組長が別室に入ったのはほんのわずかな時間だったが、出て来た時の顔色は、本当にひどいものだった。この人がこんな顔をしているのを見たのは、後にも先にもあのときしかなかった。

私は驚いて組長のそばに駆け寄り、大丈夫？　と、まぬけな事を聞いてしまった。どう見たって大丈夫なんかじゃないに決まってるのに。

組長はうずくまるように近くの椅子に腰かけた。私は組長の手首をつかむ。組長の顔を見て、なんだかひどく不安にかられた。

「私は」組長が、ためらうように私を見た。本当は女将さんの姿を探していたのかもしれない。でも、　その時女将さんは、入院の手続きに受け付けに寄っていたため、この場には来ていなかった。

「私は今、良平から足を奪った」

私は凍りついた。つかんだ手首を離してしまう。

「弾丸をどうしても取り除く事が出来ないそうだ。このままでは命が危ないし、時間もない。足を切断する事を認めるよう、求められた」

組長が呆然としたまま言った。

「私は……同意した。良平の足を奪ってしまった」

座ったまま両手のひらを見つめている。その手で覆うように頭を抱え込んだ。

「私は良平に、どうやって償えばいいんだ」
組長は絞り出すような声で嘆いた。
大変な手術になった。幾時間もの時が流れる中、せめて、命だけは助かって欲しいとみんなで祈っていた。私はあの日の出来事が、すべて今に繋がっているような気がした。あの時私があそこにさえいなければ。
助かって欲しい。そして、もう一度謝りたい。まるで全てが悪夢の様だ。
それでも長い手術の末、良平さんは助かった。一時衰弱が激しかったが、若いだけに体力が戻るのも早かった。すぐに容体は安定し、私達は彼につきそう事を許可された。
良平さんが目覚めると、まず、医者から手術の説明があった。良平さんは黙って頷きながら聞いていたらしい。それから少し間を開けて、私達が良平さんと会った。
「なんで俺を、あのまま死なせてくれなかったんです?」
良平さんは組長の姿を見ると、真っ先にそう聞いた。組長は良平さんを真っ直ぐ見つめていた。
「ま、どっちにしろ、俺は組を追い出されますね。組長の命に背いたんですから。どうせ行き場がないんなら、せめて死に方くらい選ばせてほしかった」

良平さんはそう言って顔をそむける。すると、組長が言った。
「良平。お前、真柴組を継げ」
女将さんが驚いて組長を見た。勿論私も。
良平さんもゆっくりと組長に振り返った。
「何、言ってるんですか？」
良平さんが目を丸くして聞いた。
「お前が真柴組を継げと言ったのだ。私達夫婦に子はいない。御子は女の子だ。いずれ組を出て行く。だが、いつかは誰かに組を継がせなくてはならない。良平、お前に組を継ぐ素質があるか、私が見極めてやる。お前は一番の組長候補だ」
「組長に背いて、馬鹿な真似をして、挙句の果てに片足になった俺を組長にする気ですか？　そんなの、素質なんてある訳ない」
「いや、ある。お前は組員を身体を張って守る事が出来る。そして、ウチの本質を理解している。無茶なところはあるが、組を守ろうとする心は間違いなく強い。これ以上の素質は無いだろう」
「冷静さも、人望も、ありません。いつまたこんな事をしでかすかも分からない」
「だから見極めてやると言っている。お前は私の後継者として家族になるのだ。ただし、お前にその器が備わらなければ、私は遠慮なく他の者を候補者に上げよう。私は信じている。お前は私達の家族になりうる奴だと」
「本気ですか、組長？　足のない組長なんて聞いたことがない」
「足があっても根性のない奴は沢山いる。組長に必要なのは、組を守る根性だ」

「あんたが俺を足無しにしたんじゃないか！　あんたが同意しなけりゃ、俺はこの世とおさらば出来たんだ！」
「おさらば出来ずに残念だったな。私はもう決めた。観念しろ。さあ、帰るぞ」

そう言って組長は私達を部屋から追いやった。戸を閉めると、「一人にしてやろう」と言う。

でも、私は病室に引き返した。今こそ私の『力』を使う時。きっとこれが正しい『力』の使い方だ。

「良平さん。私にあなたの心を覗かせて」
私の言葉に良平さんが驚いた顔をする。

「覗いてどうするんだ？」
「どうもしないわ。良平さんの心を知りたいだけ。同じ思いを味わいたいの。どんなに辛くてもかまわないから」

そうだ。今、気がついた。誰かと思いを分かち合う。私にはそれが出来るんだ。

良平さんがどんなに苦しんでいるか、絶望しているか、せめて共に分かち合ってあげられる。それがこの『力』の長所に違いない。私は覚悟をして『力』を使った。

良平さんの心に、絶望は無かった。そこに合ったのは、感謝。初めて心を通いあえる家族を手にする事のできる事への、感謝の念しかなかった。良平さんは照れ臭そうに目をそむけた。

「ありがとう。私達と家族になる事を望んでくれて」

私は涙をこぼしながらそう言った。

19

数日後、良平さんの彼女がお見舞いに訪れた。その時、病室には私と女将さんがいたので、私達は席をはずそうとしたのだが、良平さんがここにいてほしいと言った。

「俺の、新しい家族だ。もう、俺、大丈夫だよ」

良平さんは彼女にそう言った。

彼女はなんと言っていいのか分からないような顔で、私達に頭を下げた。私達も無言で頭を下げる。

「親父さんの手術は、上手くいったのか？」

良平さんが彼女に聞いた。

「うん。無事に終えた。完治できるかはリハビリ次第だけど」

「それなら良かった。弟、休学させたんだろ？」

「とりあえずね。でも、必ず復学させる。私だけ短大出て、あの子に卒業させないなんて、考えられない。私、ウチの大黒柱になって見せるわ。まだ、頼りないかもしれないけど」

「お前なら大丈夫だよ。俺なんかに振り回されても自分を見失わなかったんだ。きっと家族を助けられるし、家族もお前を助けてくれる」

「良君に、振り回された事なんて、無いよ」

彼女は良平さんから視線を外しながらそう言った。足元を見ないようにしているのだろう。

「そうかもな。お前、強いから。俺が一人でうろたえただけだった。

今なら色んな事が分かるんだ。お前を失って、足を無くして、家族を持って、初めて気がついた事がたくさんある。お前、俺は組の方が気に入ってるって言ったよな？　あれ、当たりだった。俺が気がついていないだけだった」

彼女は目を伏せていた。そして言った。

「ごめんね。支えてあげられなくて」

「それはおたがいさまだ。それに今まで十分支えてもらった」

「私もだわ。ありがとう」

「こっちこそ」

そういう良平さんの足元を、ようやく彼女はしっかりと目に捉えた。良平さんも彼女の視線に気づくと、

「俺は大丈夫だ。足より大事な家族を手に入れた。お前も頑張れ」

と、言う。

「そうね。もう、帰るわ。早く良くなってね。お大事に」

そう言って彼女は病室を後にした。

私は急いで彼女を追いかけた。よく考えたら彼女にきちんと謝っていなかったのだ。

私は彼女を呼びとめると、とにかく謝った。彼女は気にしてない、の一点張りだったけど。

「あの、どうしても良平さんとは、ダメ、ですか？」

ついつい聞いてしまう。

「ダメと言うか……、無理ね。二人ともどうしようもなくなっちゃうから」

「どうして？」

「良君が怪我をした日はね、私の父の手術の日だったの。私の気持ちがきっと、一番良君から離れた日」

あの日、それで良平さんは余計にヤケになったのかな？

「良君が職場で疎まれた時も、つらいならつらいで下手に出ればいいのに、私にカッコつけて何でもない風を装っていたの。それで余計に生意気に見られて、状況が悪くなったのよ。少しでも私の気持ちが離れると、すごくおびえるの。なのに私、それをしっかりと受け止めきれないのよ。こんなこと繰り返すから、互いが疲れてきちゃったの」

彼女は視線を遠くに向けた。思い出に浸るように。

「ずっと、高校生のままだったら、良かったのにね。大人になるのって、あっという間」

そして視線を私に戻す。

「もう、私達は解放された方がいいわ。互いが疲れ果ててしまわない内に。良君も、一人ぼっちじゃ無くなったしね」

彼女は私にほほ笑んでくれた。

「あなたもすぐに大人になるわ。良君の妹でいられる時間はほんの少しだけ。あなたならきっと互いに支え合えるようになれるわ」

言われた言葉にポカンとし、そして、慌てて否定した。

「あの、私、そういうつもりじゃ無くて」

「今はそうかもね。でも、あの時、あんなに見事にうろたえて、転んだくらいだもの。きっとそのうち、良君を意識するようになる。良君は、いい人よ。好きになる価値があるから」

そう言って私の肩を、ポン、と、たたいた。

「良君を、よろしくね」

そして彼女は背を向けて去ってしまった。

結局彼女の名前さえ、私は知らないままだった。でも、堅気の人との関わりはそのくらいでいいのかもしれない。これから高校を受けるというのに、私はすでに、堅気ではない感覚になっていた。

彼女の予感は当たり、私は後に良平とむすばれたが、そこにいたるまでに二十年の月日がかかるとは、その時の彼女も思わなかったことだろう。

20

私はあの清美と共に無事、志望校に合格し、高校生になった。

清美はちゃっかり入試前のバレンタインで、受験先の学校の先輩とカップルになっていた。こうなると女の子はやる気が違う。入試にもかなりの気合で望んだようだ。

彼女の張り切りように、恋の力は大きいとしみじみ感じた。ただ、上手くいけばの話だろうけど。

麗愛会に引き抜かれた面々は、半数ほどがウチに戻ってきた。会長が良平さんとの取引に応じはしたものの、麗愛会の中には事実上の別勢力があり、その力によって一時は会長の力が弱まり、約束が反故にされかけた。

だが、さらに大きな組織が黙ってはいなかった。「こてつ組」と言う巨大組織が新興組織が急激に勢力を伸ばしだした事に危機感を覚え、大きな乱闘騒ぎの末に麗愛会の勢力を大きく削ぎとったのだ。

それにより麗愛会の会長の力は復権し、良平との約束は無事に果たされることになった。

真柴も可能な限りの金策に奔走し、一人でも多く組員の身を綺麗にして組に戻そうとした。

しかし半数以上の組員は戻らなかった。戻らなかったのか、戻れ

なかったのかは、詳しい話を一切聞かされない私には分からない。だが、意外なほど彼らは麗愛会に残る事に躊躇しなかった。ウチの組の懐事情を考えて、あえて耐えたのかもしれないが、そのあっさりとした態度に、実は麗愛会の甘言に乗せられ、金に目がくらんだのだと言う噂もその筋の世界で立ったようだ。

その筋の噂と言えば、良平さんの事も噂に上った。

それまで良平さんは、喧嘩に出てもギリギリまでドスを使うことなく、仲間の身を守る一方の、地味な姿しか周りに見せた事がなかったそうだ。いかにも地味な真柴らしい。一番ガキの新入りまでやる事が地味だと、陰で言われていたそうだ。

ところが彼は麗愛会の本部に一人で乗り込み、銃弾を受けながらも麗愛会、会長の首元にドスをあてがい、後に生死をさまようほどの激痛の中で気を失う事も無く、会長と対等に交渉したのだ。その身のこなし、度胸、執念が、賛辞され、真柴は甘く見れないと恐れられた。

おかげで奪われかけたシマは守られ、真柴組は安定した。むしろ、固くなったと言っていい。

でも、当の良平さん本人は、大変な思いをしていた。足を失ったので義足を身につけ、早く慣れようと毎日歩行訓練にいそしんでいたのだ。

私は中学時代と同じように授業が終わると真っ直ぐ帰宅し、組の雑用を手伝っていたが、その間良平さんはモクモクと歩行訓練を繰り返していた。そして、掃除や片付けを手伝ってくれる。

立って歩くだけでも大変なのに、無理をしなくていいと言っても、「リハビリだから」と言って、手伝いをやめない。私も以前のようにドスの練習をしている良平さんの姿を見るよりは、今の方がずっといいので、黙って任せる事にした。

そして、組長や年配の人たちの手が空く先から、この世界のこまごまとした情報を教わっていた。あの、麗愛会の会長とのやり取りで、喧嘩沙汰や顔を利かせる事よりも、情報や、交渉力の方がこの世界ではずっと大事だと痛感したそうだ。身体は動かせなくても、組員を窮地に立たせないようにすることの方が、組を守るには大切だと気付いたそう。

組長も良平さんに、真剣に組の事を聞かせるようになったと言う。本気で良平さんを組長候補にしているって事だろう。時には何やら書類を前に、喧々諤々のやり取りをしている。こういう時には良平さんの度胸の良さがいかんなく発揮される。たとえ相手が組長でも、決して引く事は無いらしい。怒号が飛び交い、とうとう本当の喧嘩になって、互いに口もきかなくなる事もある。

初めのうちは私も心配したが、女将さんが、
「組長もハタチの子相手に、本当に大人げないんだから」
と、笑っているのを見ると、二人とも場の勢いで声を荒げているだけで、本当はお互いの意見をちゃんと尊重しているらしいと気がついた。

やがて、組長が良平さんを連れて、色々な関係先とかいう所に出かけるようになった。こうしておかないと、組長はまだまだ現役でいるつもりでも、まだ新入りの良平さんに自分の補佐をさせている

関わりが、余計な憶測を呼んでしまうのだそうだ。

こうして組の内外に、良平さんの事が知れ渡った頃、組長は良平さんを養子として真柴の籍に入れた。女の子だからと、籍に入れてもらえない私は、ちょっと良平さんが羨ましかった。

けれど、それは嬉しい事でもあった。組長を父の様に、女将さんを母の様に慕い、急に兄とは呼べずとも、互いが敬語を使う事が無くなり、私達は一層、家族らしくなった。

学校生活も思った以上に楽しかった。

清美がいる事も楽しかったが、高校生にもなると、狭い地域で大人たちの価値観の影響に振り回されるばかりだった中学に比べ、みんなもっと、自分の意思を尊重し始めていた。

私の事も、色々言う人は相変わらず言うし、気にしない人はたいして気にはしなかった。偏見を向ける人も勿論いたが、私の人柄の方を重視してくれる人もたくさんいた。そういう人達との付き合いは、自分を冷静に見る事を覚えさせてくれた。私は自分の『力』を意識し過ぎることなく、友達を作る事が出来るようになり、おかげで『力』その物もコントロールが出来るようになっていった。

清美は放課後や日曜は、部活や自分の彼氏とのデートで忙しいので、私は家事の他に組のシマの商店街の店でアルバイトをさせてもらうようになり、店を訪れる客の求めているものを探ると、店の中で最も適した商品を勧めるようになった。店の売り上げは上がり、私は自分に自信を付けた。私は公私ともに充実した日々を過ごすようになった。

21

二年生の夏休み、私は店のバイト生活に力を注ぐことにした。組になるべく負担はかけたくない。自分の学用品や日用品、ちょっと気晴らしにしたい買い物のお小遣いくらいは、こういうときに稼いでおきたかった。

これ以上の進学は望んでいなかったので、ある程度のレベルから落ちないように気を付けていれば、思う存分、バイト生活に打ちこめた。しかも私の能力は使うほどにコントロールが上手くなっていく。　私はもう、他人の心に脅える必要が無くなり、ますます日常が快適になった。

夏休み中は私以外にもバイトの子が増えて、店に同世代の子が一緒に働いてくれる。

普段は私が最年少なので、こんなことも結構嬉しかったりする。休憩時間や、ちょっとした合間に学校生活の様なおしゃべりが出来たりして、新鮮だ。

夏休みの後半に、私と同い年の男の子がバイトのメンバーに加わった。

彼はなかなか気の回る子で、仕事の手際はいいし、頼りにもなる。でも、うっかりすると他の子にいいように利用される節のある、ちょっと不器用なところもあった。

私もつい、放っておけずに、彼だけが損を被らないようこっそりと、みんなに協力してくれるよう、こまめに声をかけ続けた。

そういう事に勘が働く子なんだろう。私には「自分で気をつけるから」と言い、本人も周りに利用されっぱなしにならないように、相応の態度は取り始めた。

そして私にはとても親切に接してくれた。単純に義理堅い子なのかもしれない。たまに顔を出しに来る清美が、この子の事で「彼、御子に気がありそうじゃん」と、からかったりした。

でも、男の子のこの手の親切に、私は以前懲りている。真っ直ぐには受け止めかねて、あまりいい態度はとれない。どうしても引き気味になってしまう。

嫌われたかな？　そんな風に思っていたが、逆にある日、彼から映画に誘われた。

この手のお誘いは初めてで、照れ臭いながらも喜んで受けた。

映画は楽しかったし、彼との会話も弾んだ。誘った娘にいい所を見せようと彼も相当張りきったのだろうけど、もともとが気配り上手な子。気まずい思いをする事もなく、肩のこる事もない。相性も悪くなかったのかもしれない。

私はデートを楽しみ、彼に大いに好意を持った。学校から離れると私の頭の中はいつも組の事ばかりだったので、こういう楽しさは私をすっかり浮かれさせた。

帰る頃になると、ひょっとしたら告白してもらえるかも。と、私は期待した。でも、その日は普通に駅まで送ってもらい、「楽しか

った」と言って別れてしまった。

ただ、私の勘違いでなければ、何となく彼は帰り際に迷っていた様な気がした。

やっぱり、その筋のところで育ってる娘は嫌かな？　それとも私が言わせにくい態度を何か取っていたのかな？　考えは色々とぐるぐる回る。

……少し、覗いてみようかな。

よせばいいのに、そんな気持ちがわき上がってしまった。ほんの少しだけならと。

今考えれば一度は懲りていたのに、なんであんなに自信があったのか分からない。自分の力も、感情も、何かのゲームのようにコントロールできるようになった気がしていた。

実際、バイトや日常生活では上手くいっていた。自分の力は指先の様に、ちょっとした力加減で使えば、自由になるものと思い込んでいた。

実は無意識に普段の人間関係や、遠慮や、自己防衛なんかが微妙に絡んでコントロールできていたのだろう。でも、当時の私には分からない。『力』の便利さが、やけに魅力的に思えていた。

深入りせずにはいられない、恋愛心理に微調整は効かないのに。

始めはごく浅い意識を探る。彼の日常のこまごまとした、忘れては困る事が浮かんで来る。

ちょっと深く進むと、私とのデートの記憶。うん、あっちも楽しんでくれたんだ。良かった。

そのまま続けると、やはり帰り際に告白の意思はあった事が分かった。ただ、彼を躊躇させる何かがその奥に引っ掛かっている。

ここでやめておけばよかった。でも、恋心はこういう時にストップが効かない。

彼には別の想い人がいた。ただし、一度はフラれてあきらめかけていた恋だ。

その矢先に私と出会った。私にも好意を持っている。でも、フラれた娘にも未練はたっぷりだ。

そして、何とも悲しい事に、もっと奥を探れば、彼は私に違和感をもっていた。

私には何か普通じゃないところがあるような気がしている。彼自身もそれが何かは分かっていない。　ただ、何かが心に引っかかって、それがフラれた娘への未練を断ち切ることを拒んでいた。

そして彼は悩んでいる。とても真剣に。私にたいして申し訳ないとさえ、思っている。

私は恥ずかしかった。もう、単純に恥ずかしい。私のしたことは

恋のルール違反だ。

真剣に向き合ってくれた子に、こんな失礼な真似してしまった。ここまで深く覗くつもりじゃなかったのに。いや、浅くてもこれは卑怯すぎる。

私は「最高のバイト仲間だったわ」と言って、彼のバイト最終日をねぎらい、別れを告げた。

その後一度だけ彼から誘いの電話が来たが、やんわりと断ってそれっきりになった。

22

ちょっと苦い思いはしたが、学校、バイト、組の手伝いと、私は忙しい日々を過ごし、一年後の三年生になった夏休み、突然、組で赤ん坊を預かる事になったと、女将さんに知らされた。

「赤ちゃん？　どのくらい預かるの？」

私は数日、あるいは数十日単位で考えていたが、

「いつまでになるか分からないの。とても事情が複雑なのよ」と、女将さんはいう。

その子は女将さんや組長ともなじみのある、「華風組」と言う組の組長の妹さんが生んだ子だったが、その子の父親への逆恨みから妹さんは殺されてしまったそうだ。

この世界は顔を張ったり、面子にこだわったり、要するに見栄を張って生きる稼業で、この子の父親は結構喧嘩で名を売った人らしい。

このままでは子供も危ないと、その赤ん坊をウチに預ける事になったと言うのだ。

「父親も姿を消して、この子の素性さえ知られなければ、安全は保障されるわ。いつの日にか親の名も薄れ、ほとぼりが冷めれば華風さんに返す事も出来るでしょう。それがいつになるかまだ分からないけれど、良平も、御子も、自分の兄弟が出来たつもりで、可愛がってやってね」

女将さんはそう言って、小さな赤ん坊を連れてきた。赤ん坊は「

ハルオ」と言う男の子だった。

女将さんは赤ん坊を育てた経験がない。私だって勿論ない。はっきり言ってどうしたらいいのか分からない事だらけだ。

それに女将さんも決して若いとは言い難い年齢だ。重い赤ん坊を抱き抱えたり、あやしたりするのも、楽じゃないはず。夜中に泣きだされて寝不足になりがちなのも結構つらい。

私は今年も夏休みの間はバイト中心の生活をするつもりでいたが、予定変更。とにかくハルオのお守を女将さんと明け暮れる事になった。

この頃は組長も組の事で手いっぱい。良平は義足で歩く事だけではなく、最低限自分の身を守る事が出来るようになろうと再びドスを握り、孝之さんから特訓を受けるようになっていた。ハルオの事は気にしながらも、それどころじゃ無かったのだろう。

組の男達はもっとアテにならない。赤ん坊を面白がることはあっても、おむつの一つも変えてくれるわけじゃないし、眠りかけたハルオを起こしたりして邪魔になることこの上ない。ハルオに手を出すよりも、自分の部屋や、風呂の掃除でもしてもらった方がよっぽど役に立ってくれる。私の高校最後の夏休みは、すっかりハルオに振り回されてしまった。

そこに意外な助っ人がやってきた。清美が兄の子の世話で慣れているからと、ハルオを見に来てくれたのだ。こんなところに出入りをしてはどんな噂が立つか分からないと言っても、

「赤ちゃんは経験者がいないと面倒見るのは大変よ。私は御子の家に遊びに来ただけ。誰が何を言おうが、変なことはしていないんだから堂々とするわ。気にしないで」
と言って、聞く耳を持たない。

実際私と女将さんでは赤ん坊の世話は危なっかしくて仕方なかったらしい。こんな時に駆けつけてくれる友人がいるなんて。高校に通って良かった。

それでも赤ん坊の世話と言うのは毎日の事なので、大変だと思いながらもいつの間にか、その重さにも、耳をつんざくような泣き声にも、しょっちゅう変わるお腹の調子やおむつのずれ具合にも私は慣らされてしまった。
夏休みが終わって学校に行っている間にもハルオの事が気になるほどで、帰ってくると真っ先にハルオの様子をうかがうようになってしまう。

そんな私の様子を見て、時折組長は、
「赤ん坊は可愛いな。お前もここを出たらこんな子を抱いて、幸せに暮らせるんだ。そんな日が待ち遠しいんじゃないか？」
なんて聞いてくる。

力なんか使わなくても組長の腹は読めている。私もあと半年で卒業する。そうしたら堅気の世界に追いやって、どこかに嫁がせてしまおうという魂胆なんだろう。

組長は私をこの世界にいさせるつもりはないらしい。初めから私が大人になるまで、預かり育てるために私を引き取ったと言ってい

るし、私を堅気にする事に腐心している。

何故なら私は、とっくにここから出て行かないと、決心しているからだ。

バイトだって、組長にしてみれば私を堅気の生活に慣らすための準備だと思ってやらせているらしいが、どっこい、そうはいかない。私にとってはシマと組との関係性を学ぶ大事な場所であり、必要な情報だけを上手く読めるようになるための、『力』の訓練場所でもあるのだ。

情報力の大切さは、良平の一件でも良く分かる。あの時、組が入念に麗愛会の事を調べあげていたからこそ、良平の無謀な交渉は成立させられたのだ。ただの無茶だけじゃ、ああはいかなかったはず。女の私が腕っ節を盾にするのは難しい。私は「口を割らせ」なくても情報を知ることができる能力があるのだから、これを生かさない手は無いだろう。

そんな私に堅気に嫁いで、円満な家庭生活を送らせようと組長は考えているのだ。

ハルオが這いまわるようになり、私と女将さんが夢中になっていると、

「子供の成長は嬉しいものだ。お前も自分の子の時には、もっと嬉しい思いが出来るだろう」

と、わざとしみじみとした声を出す。

ふーん。女の子の母性本能に訴えようって訳？　甘い甘い。私の年じゃ、まだまだ母性よりも、自己主張の方が激しいんだから。ま、それだけ自分が子供だって、認めることにもなっちゃうけど。

「ホントね。赤ちゃんって可愛い。でも、こんな男だらけで子育てには役立たずの人しかいないところじゃ、女将さん一人でハルオを育てるのって大変だわ。ハルオが親元に帰るまで、とてもじゃないけど私、ここを離れられないわね」

と、組長の魂胆を逆手に取ってしまう。

こうして私と組長の攻防が幕を開けた。

23

私は高校を無事に卒業すると、バイトで一番慣れた店に店員として雇ってもらった。職業選択の自由を主張し、組長から強引に保証人の判を押してもらう。ダメでも女将さんがいるしね。

店と直接雇用契約を結ぶのだから、いくらシマの店とは言え、組長に文句は言わせない。店の人たちともすっかり親しくなっているし、何より私にはバイト時代の実績がある。店の方でも喜んで雇ってくれた。

清美や高校の友人たちとは、寂しいけれどわざと連絡を断った。彼女たちは進学したり社会に出たり新しい道を歩き出している。私はそういう道を自分から拒んだ。組にこだわって、彼女たちとは違う道を自分で選んだ。きっと彼女達も分かってくれたと思っている。

もう、彼女たちに頼らなくても生きていける。私はそう思っていた。

本当は組の仕事にも直接かかわった手伝いもしたかったが、組長は私が未成年である事を盾にして、今でも私を事務室にさえ入れてくれない。それどころか暇さえあれば見合い話を持ってくるようになった。

まだ、ハタチにさえならない私に何処からこんなに話を持ってくるのだろうとあきれるほど、いろんな人を紹介したいと言ってくる。

多分組長は私の頑固な性質を知って、ハタチになってしまえば、強引にここの組員として居座ってしまうだろうから、その前に堅気の男とくっつけてしまおうと考えたのだろう。

そして、それは当たっている。私は成人したら組長がどんなに反対したって、ここの組員になることを決めている。

大体、男をあてがってしまえば、くっついて堅気になるだろうと言う、その考えが気に入らない。私がどんなにこの組を愛しているか、組長だって知っているはずなのに、所詮若い娘の気持ちなんてその手の事には弱いものと、どこか舐めている節が感じられる。

こんな態度を取られては、私はなおさら納得いかない。ここは私にとってただの組織じゃない。私を救ってくれたところであり、成長を見守ってくれたところであり、何より大事な家庭なんだから。

そしてそんな私の気持ちを組中のみんなが知っていた。良平は勿論、女将さんでさえ、私がここのみんなと離れたくないと言う事を分かってくれていた。

だから私は自信があった。成人するまでの間さえ凌いでしまえば、必ずここにいる事が出来る。だって組中みんなが味方をしてくれているから。

前に私をここに置くかどうかと組長が迷った時も、みんなが味方をしてくれた。女将さんでさえ私の味方だった。今回だってそうだ。反対しているのは組長だけ。こういう時、私の望みは必ず通るはず。

私は前の件で、しっかり味をしめている。

しかし組長の猛攻もとどまる所を知らない。

朝、顔を合わせれば、

「会わせたい男がいるんだが」

と言い、出がけには、
「どういう男が好みだ？」
と聞き、帰宅すれば、
「せめて電話で話だけでもしてみないか？」
と懇願される。

そのたびに私は、
「私は会いたくないの」
と言い、
「ここに私のおムコとして来てくれる人がいい」
と言い、
「いくら千里眼でも、電話の声で人を好きになれるほど器用じゃないの」
と突っ張った。

そのうち組長はキレてしまい、
「こうなったら、堅気の男なら誰でもいいから、無理にでも縁づかせてやる！」
なんて怒鳴り出す。

そこで私は急にしおらしくなると、
「組長は、私に好きでもない男と強引に一緒になれって言うんですか？　一生がかかっているのに？　随分、残酷なこと、言うんですね」
と言って、組長から顔をそむけ、だんまりを決め込んでしまう。

すると組長はうろたえて、
「そんなつもりはないのだ。勿論、お前の幸せを考えてのことだ。お前だって分かっているだろう？　決して無理強いはしないから……」

なんて、あべこべの事を言い出す始末。

子供の頃は愛される事への自信のなさから意地を張って、組長にいいように振り回されていたけれど、今や私は組長の愛情に疑いを持ったりはしない。私の方が組長を手玉に取っていた。

そのうち組長の人脈のネタも切れて来て、とうとう私へのお見合い攻撃も終わりを告げた。

組長だって、私を自分の遠くにやりたくは無かったらしく、自分に関係の遠い人や、現実的な距離の遠い所を選ぶわけにはいかなかったようだ。

いくら組長でもそんな身近な人間だけの中から、私の相手を探すのには限りがあったんだろう。弾切れを認めて、「当分嫁にはいかなくてもいい」と白旗を上げた。最初っから勝負はついていたんだけどね。

それでも相変わらず組長は私に組の仕事に関わらせず、事務所も立ち入り禁止だった。

でも、実は私は良平や女将さんからこっそり帳簿を見せてもらったり、孝之さんから護身術を教えてもらったり、こまごまとした事まで把握していた。それはみんなも知っている。実質組員同然になっていたのに、お見合い攻撃に夢中で、組長だけが気づいていなかったのだ。

そして私はとうとう、待ちに待った二十歳の誕生日を迎えたのだ。

24

二十歳の誕生日を迎えた日、私の体制は盤石に整えられていた。

何せこの組に連れて来られて八年間、ずっと組員になる事を目指して準備をして来たのだ。抜かりがある訳がない。

組員全員は勿論、女将さんも、良平も、お世話になったシマの商店街の人々みんなも、私の味方だった。組の内情や、現在のシマの状況も把握してある。この街にある裏社会組織の大体の力関係も、大まかだけど知っていた。

私の最大の武器である、『力』のコントロールも出来るようになっていた。この『力』を使って、出会う人々の意識を探り、情報を正確に把握するのが、私の主な仕事になる事も理解していた。

この世界が見栄と、腕っ節に頼りがちで、恨みを買いやすい事も分かっている。それが時に悲劇を生む事も。良平の失った足と、ハルオの微妙な立場がそれを私に教えてくれた。

何より私には覚悟が出来ていた。そういう危険や、偏見や、悲劇を受け止める覚悟を持って、生き続けようと心に決めていた。これだけ準備が出来てこの世界に入る者はそう、いないはずだ。

これで組長も折れるだろうと私は思っていた。たとえ折れなくても私は実質組員としてここに居座り続けるつもりでいた。ところが組長はしつこく条件をつきつけてきた。

「分かった。お前の組入りを認めよう。ただし、二つ条件がある。一つはもし、堅気の男に惚れた時には、潔く組を去ること。その時にはきっちり足を洗ってもらう」

まだ、そんな事を言っているのか。私はうんざりしたが、

「これは大切なことだ。良平のように親がこの世界にいたために、巻き込まれて子供もこっちの世界に流れて来ることは多い。これを繰り返しては負の連鎖になってしまう。お前は女だから、子をなせば母になる。母親が子供に与える影響は大きい。堅気に惚れれば、いつ子が出来るとも分からない。だからその時は絶対に足を洗うのだ」と、組長は真剣に言った。

私に限ってそんな事は無いと思うが、万が一という事もある。組長のいい分は正しいと思ったので、私は「約束します」と言って条件を飲んだ。

「二つ目は、良平とは決して、一緒にならない事。あれはウチの後継者だ。一度一緒になれば、良平と何かあっても、お前は何処にも動けない。他の者なら足を洗って堅気の男と一緒になる事が出来るが、良平はあいつが後継者の道をあきらめないかぎり、別れても、先立たれてもお前は『組長の元妻』となってしまう。私はお前がその名を背負って再婚することを許さない。その時は一人身を貫いてもらわなければ、事情が複雑になり過ぎる」

「そんなことありえないわ。私にとって良平は兄だし、まして良平に先立たれるだなんて。縁起でもない。組長の考え過ぎです」

「そこまで考えるのが組長だ。あいつには少し無茶なところがあるから、何があるか分からん。私は何としてでも良平に組を継がせたい。足を失ったあいつに組を継ぐという希望を持って生きてもらいたい。それがあいつの足を奪った私にできる、せめてもの罪滅ぼしだ」

私は組長が手術の許可に同意した時の事を思い出した。あの時組長がどんなに苦しんだかを。

「人生は長いものだ。私はお前に堅気で生きる道を、捨てて欲しくは無いのだ。お前が組入りすれば、お前と良平は一層身近な存在になる。もし、良平がお前を選べば、お前は組に縛られ、良平にはその責任がのしかかってくるだろう。それがお前達を幸せにするのかどうか、私には分からない。これは組長としてと言うより、お前達の親としての願いだ。お前達の幸せのため、良平とは一緒にならないでくれ」

私としてはすでに生涯を組に捧げる覚悟でいるけれど、それが組長の不安になったり、良平の重荷になったりするならば、そんなことは避けた方がいいと思った。

第一、良平は私にとっては家族で、兄としてしか見ていない。言われた言葉も（大げさだなあ）としか受け取れずにいる。一瞬、良平の元の彼女の言葉も思い出しはしたが、それより私にとっては組長から組員として認めてもらう事の方が大切だった。

「分かりました。二つとも約束します。だから私をここの組員として認めて下さい」

組長はようやくうなずいてくれた。渋々って感じだけど。

私はこの約束がどうにも頼りなく思えた。組長は二言目には「堅気、堅気」と言ってたし、返事の仕方もあいまいだ。なにか確かな証が欲しい。

「組長、私と杯を交わしてくれませんか？　昔はここもそうやっていたんでしょう？」

私は女将さんから若い頃に着ていたという振り袖を着せてもらった。私がお世話になった組の関係者は皆呼んでもらい、麗愛会に行っている元組員達にも来てもらった。

私としては、これはただ、組入りする儀礼的な儀式ではなく、自分の成人の証しとして、感謝を込めて、みんなに披露したいと思ったのだ。

急に無理を言ったので、組長が軽々しく済ますのではないかと心配したが、そんなことは無かった。

組長は正装した私を恭しく扱ってくれた。みんな、感慨深そうに見守ってくれて、良平も頷いてくれていた。女将さんは涙ぐんでさえいた。

こうして私は真柴組の組員になった。ただ、この時の組長との約束が、その後の長い年月にわたって、私に厄介な思いをさせるとは思ってもみなかった。

25

私が組員になったからと言って、私の生活や組の日常に大きな変化がある訳ではなかった。

私は相変わらず女将さんを手伝い、ハルオの面倒を見ていた。そしてこれまではこっそりとしていた事務室でのシマの状態の確認や、孝之さんに教わる護身術の稽古を堂々とするようになる。

顔を張ったり、人をひっかけることが上手くない私は、組の金品の出入りや、シマの店の経営状態のチェック、相談ごとの本音を見抜く事が普段の主な仕事になり、もう、それだけで手いっぱいで、見回りや用心棒に出て歩く事はまだ、考えていなかった。

ハルオは順調に成長し、人のいう事を聞かなくなってきた。赤ちゃん時代は卒業で、反抗期にはまだまだ早いけれど、好奇心が上回って大人のいう事など意に介さない時期が来ているのかもしれない。何にでも触りたがるし、どこにでも潜り込むので目が離せない時期でもある。

その中で、ハルオが極端に脅えるものがある。刃物だ。包丁だろうが、果物ナイフだろうが、カッターだろうが刃先の鋭利なものを見るだけで、尋常ではない脅え方をする。

何でも母親が刺殺された現場にハルオもいたそうで、何も分からない赤ん坊でもその時の衝撃は十分に受けていたのかもしれない。

今考えれば徐々に恐怖を取り除いてやればよかったのかもしれないが、子育てなんてした事がなかった私や女将さんにその余裕はな

く、ハルオが脅えるものはなるべくハルオの目に触れないようにしてしまった。私達にはハルオは『預かっている子』と言う気持ちもあったから、大きなけがをさせる訳にもいかない。だから私に外を回って歩く余裕など無かった。

多少の変化があった事と言えば、それまで室内で型を教わるばかりだった孝之さんの稽古を、良平と一緒に庭先で動いてみるようになったくらい。

実際に身体を動かす事に慣れて来ると、私は孝之さんや良平の動きをちょっと先読みできるようになり、つい、イタズラっ気が出て、孝之さんの動きを邪魔して止めてみたりする。

これに孝之さんは驚いただけではなく、私に孝之さんの考えた通りに動いてみろと言う。

私は孝之さんの動きを、少し先を読みながら真似た。孝之さんが動くとその動きはピッタリと重なったらしい。良平が驚いてみているのが分かった。

「千里眼にこんな使い方があったとは思いませんでした」

孝之さんはあきれたように言った。

実は私はこういう事が前から出来た。体育の授業で球技なんかをすると、身体が慣れるに従って相手の動きが読めて来る。心を読むまで深く集中しなくても、瞬時に相手の次の行動がピンとくることは今までにもあったが、バイトや友人関係や孝之さんの稽古などを通じて心を読む深さ、浅さの加減が効くようになると、一層、その勘が働くようになり、相手の動きをその都度読んだり、裏がかける

ようになっていたのだ。

「裏がかける？　それじゃ御子ちゃん、ちょっと良平さんの相手をしてみて下さい。良平さんは動ける範囲に限りがあるから、かわしきれるはずです」

言われたとおりに良平と向き合って見る。さすがに良平からは襲って来ないので、私が先に手を出すが、良平はそれをかわす。そしてすかさず私に手を伸ばすが、私はそれをすべてよけてしまう。ついには義足のバランスを失った良平の方がひっくり返った。

「ちょっと、良平、大丈夫？」

私は良平を助け起こしたが、

「大丈夫だが……。驚いた。まったく捕まらない」

良平は呆然としている。

「やはり良平さんでも捕まりませんね。いや、私の動きの真似だって、コピーってもんじゃない。私よりわずかに先に動いていました。だから見た目にはピッタリなんです。目で見ていたらほんの僅かでも動きが遅れるはずですから。御子ちゃんは私の動きを知っていて動いているんです。こういう事では見切るって事は一番大事なんです。御子ちゃんは完全に自らの身を守る事が出来る。良平の素早い動きを避け切れるんですから、誰も御子ちゃんを捕まえるどころか、触る事さえできませんよ」

「本当？　じゃ、私もいざって時には喧嘩に出られるの？」

「まさか。捕まらないのと相手を叩きのめすのは違いますよ。何より女性じゃ腕力が違う。ただ、相手の裏をかいてやりこめることは可能でしょう。さっきの良平さんの様にバランスを崩されたら相手はどうにもできないでしょうから。護身術ってのはそれを利用して

いるんです。これが完全に身に着けば、ある程度の相手を倒す事も出来るでしょうが」
「なら、出来るようになりたいわ。組のみんなに、怪我なんてさせたくないもの」
「喧嘩はスポーツじゃないんですよ。ルール無用で相手は武器を持ってるんです。たとえ相手に触られないと分かっていても恐怖が伴います。それ相応の度胸がなければ無理ですよ。御子ちゃんには向いていません。あくまでも身を守る稽古だと思ってやって下さい」
孝之さんはそう笑い飛ばし、良平はうんうんとうなずいている。
そんなに私、向いてないのかなあ？

それでも身を守るすべは必要だと言う事で、私達の稽古は続けられた。そのうちに私は孝之さんとよりも、良平との方が動きの呼吸が合っている事に気がついた。

それに私を捕まえようとするうちに良平の動きも一層キレが増し、素早くなってきた。なまじ呼吸が合うだけに私も動きが読みやすく、それに追いつこうと身体を動かすから、知らず知らずのうちに良平の動きも良くなっていくのだ。

26

それから三年の月日がたち、私の組員ぶりもすっかり板についてきた。ハルオもすくすくと育ち、そのおかげで華風組とは良好な関係を保ち続けていた。

麗愛会にも、ウチの元組員がいるので、そこそこ安定した関係を保っている。

喧嘩が起きるのは生意気な不良が突っかかったり、酔っ払いが絡んだりすることで起こるトラブルくらいなもの。それでもみんなは女の私を喧嘩や小競り合いに巻き込まないようにと、見回りや用心棒的なことはさせてくれなかった。

喧嘩と言えば、以前は喧嘩の助っ人に活躍していた良平は、自分が思うように動けない事に歯がゆい思いをし始めていた。足を失って何年も経ち、義足にも慣れ、日常生活での不都合はほとんどなくなったが、以前のように助っ人に出て組員を守ると言うわけにはいかなくなった。

良平も初めのうちは自分が組のお荷物にならないように、自らの歩行訓練や、組の内情を知る事や、これからどうシマを管理するかなど、真柴の跡継ぎに相応しくあろうと努力するのに精いっぱいで、喧嘩の事はそれほど気に留めずにいたらしい。

ところが月日が経つうちに、別の問題が持ち上がってきた。それまでは喧嘩沙汰や暴力沙汰は同じ街の組織の中で起こる事がほとんどだったのに、街の景気が良くなるにつれて、街の外からいろんな

勢力が入りこんでくるようになった。

同じ街の中の互いが分かっている組織だと、慣れ合いと言われようが、なあなあと言われようが、互いの義理や顔を立て、ここまでしたらこの辺で引っ込むというような力加減のようなものがあった。

同じ街の中で互いが面子を立てあって長い年月を重ねたのだから、最低限の義理はお互い果たしましょうと、暗黙の了承が成立したりした。（時にそれが破られるから、抗争沙汰が起こるのだ）

ところが外からやってくる勢力はその辺の力加減が互いに分からない。ちょっとした事ですぐに大きな喧嘩沙汰に発展する。真柴組の周りも、騒がしくなってきた。

こうなると良平も、自分の身を守るだけでは飽き足らなくなるらしい。

以前は組員がピンチに陥るたびに助っ人に出向き、それ以上、指一本触れさせないよう全力でみんなを守っていたのだ。足さえ前のままであれば、今だってみんなを守る事が出来たのにと、思わずにはいられないのだろう。

店のトラブルの小競り合いの後など悔しそうに義足を見つめ、舌打ちを打ったりする姿を見かけるようになった。

この姿にみんな、胸を痛めた。特に、組長と私はつらい思いに駆られる。

組長は手術時に良平の足の切断の許可を与えた事を悔いていた。

そうしなければ彼の命は無かったのだからどうしようもないのだが、それでも足を失った一生を彼に強いてしまっている事が組長を苦しめるのだろう。あの時彼に生きてほしいと願ったのは良平自身ではなく、私達の方だったのだから。

私もつらい。私は自分が立ち聞きや覗きをした事で、良平にヤケになる原因を作ってしまったような気がしていた。何年の月日が流れようとも、罪悪感が薄れることは無かった。

組長は結果的には良平の命を救い、真柴の跡継ぎになるという生き甲斐を与える事が出来たけど、私は良平になんにも出来ない。ただ、後ろめたさが残っただけだ。

他のことでの悩みなら、私なんかが口出しすることじゃないけれど、足の事で悩まれるのは私にとっても傷をえぐられるような思いがあった。

そこで私は考えた。私が良平の足の代わりになれないかと。

良平の動きの良さは私が一番よく知っていた。孝之さんをかわすのは、今では造作なく出来るようになったけど、良平は動きが日々鋭くなっていて、一瞬の気も抜けない程だった。頭では分かっているのに、身体の動きがついて行かない。それほど良平の動きは速いのだ。

私は心が読めるから逃げ回るのは得意だけど、腕力は無い。だから私がおとりのようになって良平の攻撃できる範囲に誘い込むようにすれば、互いの長所が生かせるんじゃないかしら？

でも、良平は私の提案を頭っから笑い飛ばした。

「御子、お前、喧嘩がどういう物か分かってないだろう？　ひとたび喧嘩になれば、誰もが冷静でいられなくなっている。命を取り合う覚悟で向かっているんだ。そんな中でおとりになって、俺の懐に逃げ込むから、攻撃してくれ？　ふざけるのも大概にしろ。女に喧嘩が務まるか。そんなにやりたけりゃ、自分で相手を叩きのめせるようになってからやるんだな」

そう言ってげらげらと笑っている。話を聞く耳なんて持ってはくれない。人の気も知らないで。

私は真剣だった。どうすれば自分の力で相手を倒せるのかあれこれと考えた。どんなに鍛えたって女の私の腕力なんてたかが知れている。良平の様に刃物でも握る？　いや、相手を刺すのは本意じゃない。相手の武器から身を守る道具に使っても、刃物で人を襲いたくはない。

と、なると、あとは相手を翻弄して、勝手に倒れてもらうしかない。孝之さんは護身術は相手のバランスを崩す力を利用しているって言ったけ。ならば動きを読むだけじゃなく、こっちの意図に合わせた動きをさせて、徹底的にバランスを崩してやればいいんだわ。

私はそれから、稽古の度に良平のバランスを徹底的に狙った。孝之さんでは動きが遅い。ちょっと動きに変化をつけると、すぐに倒れてしまう。良平は片足になってから、とっさの平衡感覚を取るのが上手くなっていた。彼を相手に稽古をすれば間違いなく私は実戦に使える技術を手にできる。私は全力で良平に向かうようになった。

27

私が良平を相手に稽古をする事を、組長が良く思っていないことは知っていた。口で言わなくても、心を読まなくても、それだけはっきりと組長は顔にあらわした。

でも、私はわざと無視した。組長も何も言って来ない。何故私が良平の足の事にこだわるのかを、組長だけが知っていたから。

私は自分の後悔をあの手術室の前で、全ては語らなかったとはいえ組長にだけ話した。私が組長の後悔を忘れる事がないように、組長も私の後悔を忘れてはいないのだと思う。

そして、組長との二十歳の誕生日の約束も忘れてはいない。

私が良平と距離を縮める事を良く思わないのは何も組長だけではなかった。難しい事に悩んだ時、組のみんなはいつも私の味方でいてくれたが、良平との距離だけは誰もがいい顔はしてくれない。

いくら私が生涯を組に捧げると言っても二十代の私は若すぎるらしく、みんな心のどこかで私を組に縛りたくない、足を洗ったり堅気と一緒になるチャンスは残しておきたいと思っているみたい。

良平自身も出来れば私の相手はしたくないと思っているのが分かる。きっと組長にくぎを刺されているに違いない。それに、私を本気で実戦に使う気がない事も見当はついた。

それでも私との稽古を続けているのは、彼自身が迷いの中にいる

証拠だ。良平も今の自分の動きでは物足りないと思っているだろうし、私との稽古が彼を鍛える大切な役目を担っている事を認めている。　片足による不利を少しでも補う事が出来るかもしれないと、この稽古に一縷の望みを託しているのだろう。

だから誰もが良くないと内心思いながらも、私と良平の稽古は黙認され、続けられていた。

そんな中で、とうとう組に大規模な喧嘩沙汰が起こってしまった。隣町の勢力が華風組を取り込み損ね、その余波があわよくばウチのシマを乗っ取ろうと、まるで八つ当たりの様に襲いかかって来たのだ。

華風組は自分のシマを守った直後でウチに気を回す余裕はない。関係が良好とはいえ、いや、だからこそ、華風組には迷惑をかけられない。

ウチは総力戦の様相で乱闘に向かった。当然、良平も喧嘩に向かう。こんな時でも私には組長の許可が下りない。それで黙っている私でもなかった。

私は孝之さんにかくまってもらい、こっそりみんなの後をついて行く。みんな目の前の喧嘩の事で頭がいっぱいらしく、意外と私に気を回す様子は無かったので、私は乱闘が始まるギリギリまで誰にも知られることなく皆の後ろについていられた。

みんなが喧噪のなかに飛び込む直前に、私は良平の後ろに回り込んだ。良平が気がついた時には私は乱闘の渦の中。もう、誰にも私を止めることはできないはず。良平が私に向かって何か言ったよう

だが、私は聞く耳も持たずに良平の前に出た。

喧嘩の相手達と向かい合う。相手の動きを読もうとその目を合わせたその時だった。

相手の興奮、熱気、感情が一気に私になだれ込んで来た。思わずその勢いに呑まれそうになって、身体が引いた。良平が舌打ちして私を後ろから引っ張り寄せる。そのまま私の横で、構えたドスで相手を威圧した。

「だから言ったんだ。いきなり相手の心を読むなって」

そう言っていたのか。私自身も初めての喧嘩で冷静さを失っているらしい。

「足手まといだ。さっさと帰ってくれ！」

良平が私を怒鳴る。でも、そのくらいの事言われるのは分かってた。

「大丈夫よ。任せて」

そう言って再び相手の目を睨みつけた。

また、相手の感情が私に襲い掛かってくる。確かに手に武器を持った、そのやみくもな興奮に私も恐怖を感じた。でも、かまわずその感情を受け止め続ける。ありったけの意思の力でその感情を封じ込める。私にはその力があるはずだ。

ついに相手の感情の向こうにある、どう、動こうかと言う思考を

感じ取った。私は早速素早く動いて相手を翻弄する。相手は一層ムキになって私に感情をぶつけてきた。

それに対して私はさらに自分の意思を目に集中して相手を睨む。あんたは私には敵わない。私はあんたの考えがすべて読めるんだから。あんたの感情をすべて見透かしてしまえるんだから。

この瞬間、私の目は私の物じゃなくなった。私の身体の一部でありながら、その瞳は私を超えた存在になる。その瞳を操る力も、私の心から離れて行く。

相手ははっきりと私の瞳に恐怖を感じているようだ。それはそうだろう。これは私と言う人間の瞳じゃない。もっと大いなる何かの力が、私の目を借りて相手を威圧しているのだから。

私に睨まれた相手は、皆、一様に動揺した。戸惑い、目を離せなくなる者もいれば、はっきりと脅える者もいた。たまらず目をそらそうとする者には容赦なく一層の力を込めて睨みつけた。

すると相手は戦意を失って逃げ腰になったり、私の瞳から逃れようとして、私から離れようと必死になる。そこを良平が襲いかかる。時には私自身も短刀を振りかざしてみせる。私達の周りにいた相手は、皆、散り散りになって逃げ出して行った。

あっという間に乱闘は終息した。特に私の普通でない力に恐怖を感じた者たちが、まるで化け物でも見たかのように、恐れをなして逃げだしたので、その様子に異常さを感じて、皆が撤収したようだった。

28

「誰が足手まといですって？」私は良平に不敵な笑いを見せた。

「私に度胸がないって、良平も孝之さんも思ってるみたいだけど、女の度胸って、男の人みたいに勢いや意地に頼る必要ないの。私はずっと、他人の心や想いを我が事の様に受け止めて来たわ。否応なしにね。だから人の怒りや憎悪、悪感情を恐れたりはしないの。たとえ殺意を持っている相手でもね。この世にこんなに度胸の必要な事ってないと思うわ」

私はあっけに取られている面々から、組長の姿を見つけて言った。

「組長。私を喧嘩にも出させて下さい。私には覚悟があるんです。そして良平と組ませて下さい。今、ご覧になってましたよね？　私の瞳の力に振り回されない集中力とスピードを持っているのは彼だけです。そして、彼は私の腕力の足りない部分を十分補ってくれるんです」

「だが、俺と組むのは」良平が言いかけたが、私は言わせる気は無かった。

「私、良平にかばわれる気なんてありません。勿論、かばう気もないわ。でも、私達が組んだ方がより実戦に有利なのは今の通りよ。組長、私を実戦で使って下さい。良平と一緒に」

しばらく組長は考え込んでいた。でも、ついには、

「そういう実戦が、あまり起こらない事を祈るしかないだろうな」

と、言ってくれた。

組長は私を組員として本当に認めてくれたと、この時思った。そしてそれが誇らしかった。その時の私は口で言うほど自分の『力』を分かってはいなかった。何故他人が私の瞳をここまで恐れるのか、薄々は気付いていたかもしれないが、その場では分からない。

自分の心次第で、この『力』が自分に向かう刃になるとは気づいていなかったのだ。

「ところでお前が持っている、そのドス。どうしたんだ？　私はお前に預けた覚えはないが」

ギクッ。使わずに済むかもと思って、隠すのを忘れてた。

「あ、あの。これ、神棚に祭ってあったのを、ちょっとお借りしちゃって……」

組の事務所の神棚から、勝手に拝借しちゃったんだよね。

「神棚？　お前は先代が魂込めて使っていたドスを勝手に持ち出したのか！　それはウチの家宝も同然に、大切に祭り続けてきた特別な品なのだぞ！」

組長は池の鯉みたいに口をパクパクさせる。

「え？　ホント？　知らないで練習にも時々使ってたんだけど」

組長の顔がみるみる真っ赤に染まっていく。

「バカ者ー！」

特大の雷が落ちてしまった。だって、しょうがないじゃない。みんな、私に喧嘩の道具に関わらせたくないからって、そういう事、教えてくれなかったんだもーん。

私はみっちりとお説教を受けたうえで、良平とともに喧嘩の助っ人に出る事を許された。

その代わり、良平とはより、距離を置くようにと言われる。同じ組の中にいて距離を置けって言われても、出来る事に限りがある。これを受け入れたら私はまた、事務所に近づけず、家事と雑用専門の係りに逆戻りさせられてしまう。

「そんなのとても無理。私も組員としての仕事は続けたいんです」

「ならば、良平と稽古をするのはやめるんだな」

と、組長はにべもない。

稽古もせずにぶっつけ本番で喧嘩に出られるとは思えない。何より今更孝之さんの相手や、一人稽古になっては、良平が満足できないだろう。

「稽古は止められません。そんなに言うなら私、稽古の時以外、良平とは一切口をきかないわ。それならいいんでしょう？」

私は半ばヤケになって言った。

すると組長は驚いた顔をし、そして複雑な表情に変わった。私をじろじろと見つめる。

「なんです？　それでも納得してもらえませんか？」
これ以上、どうしろって言うのよ。
「いや。そんなことはしなくていい。お前達の思うようにしろ」
組長は何だかあきらめ気味に言う。
「納得してくれてないじゃないですか。そんな嫌みな言い方して」
「嫌みではない。実は良平も同じことを言ったんだ。お前とは口をきかないから、無理を言わないでくれと。これでは私が何を言っても仕方がないだろう」
そう言って組長はため息をついた。

結局私と良平はそれから稽古の時以外は口もきかず、目も合わせなかった。組長にあんなことを言われては、意地でも良平と距離を取らずにはいられない。良平も同じ気持ちの様で、私とはわざとらしいくらいに徹底的によそよそしい態度をとった。
そのたびに事務所の中にしらっとした空気が流れる。個人に戻った食事時など最悪だ。

女将さんが
「組長もかまわないと言ってるんだから、そんなにムキにならないで。私達は家族でもあるんだから」
と、言ってくれるが、私も良平も、すっかり意固地になってしまって、どうする事も出来ない。

組の中の空気も悪くなり、とうとう良平も悩み始めてしまった。
そこに女将さんが朗報をもたらしてくれた。良平に、特別な義足

を作ってもらってはどうかと、話を持ちかけて来たのだ。

「まだ、義足作りを始めて間もない人だけど、元が刀研ぎでこの稼業の事をよく知っている人なの。一人ひとりの動きや生活様式に合わせて、かなり特殊な動きにも対応したものが作れるって、期待されている人なのよ。この人に作ってもらえば、足の動きをかなり補えるかもしれないわ」

そう言って、その職人を紹介してもらえる事になった。

29

駆け出しの職人と聞いて、私達は若い人を思い描いていたが、良平が直接会って見ると倉田さんは中年の一見、厳しそうな人だったらしい。組長と、そう年齢も変わらないだろう。

元が名の通った人斬り道具専門の刀研ぎだと聞いて、成程と思ったそうだ。全身から研ぎ澄まされたような緊張感を感じさせる人だったらしい。

こんな人が足を洗って、自分と年齢に変わりのない人を師匠とし、一から技術を学んでいると言う。普通では考えにくいが、おそらく物作りにとりつかれた、根っからの職人気質なのだろう。

良平は彼に合って開口一番に、こう問われた。

「お前さんは俺の作る義足で、一番何がしたいんだい？」

義足でしたい事と言えば、当然、「歩きたい」とか、「人の手を借りない生活をしたい」と答えるに決まっているのに、わざわざこんなことを聞いたのだそうだ。そして良平はこう答えた。

「ドスを握って、組を守り続けたいです」

これを聞いて倉田さんは喜んで笑ったと言う。

「やっぱりお前さんは、普通の奴とは違うようだ。俺に義足を作って欲しいと言ってくる奴は、皆、足を洗った者ばかりだった。堅気

に戻らなきゃならなくなったが、せめて、普通にあるいて暮らせるようになりたいと言う者ばかりだ。ところがお前さんは足を洗うどころか、真柴組の跡取りとして養子になったって？　しかも、ドスを握って喧嘩に出るつもりでいやがる。本当ならこの話、俺は断ろうと思ったんだ。足を無くしても、まだ、命を粗末にする気でいる奴に、義足なんて要らんだろうと思ってな。だが、お前さんは組を守り続けたいと言った。この先の人生、生きる気満々でいやがる」

良平は倉田さんに大いに気に入られ、自分と一緒に新しい義足の可能性を追求しないかと言われたそうだ。

「あんたはこれからの人生に人一倍積極的に生きようとする気概を持ってる。きっと普通の義足では満足できまい。俺もまだまだ半人前だが、お前さんが満足できる義足を作ってやりたい。俺も元は人斬り道具を扱っていた。喧嘩の事も多少は分かる。一緒に、あんたの組を守れる義足を考え、作り出そうじゃないか」

こうして良平は倉田さんの工房に入り浸るようになり、私との稽古の機会は、ずっと減る事になった。組長は胸をなでおろし、私は仕方なく孝之さんを相手に稽古をするようになった。

こうなれば私と良平が互いに無視する必要なんてないはずなのだが、私達は何となく、必要以上に口をきく事が無くなった。意図的に距離を取ったのが災いしたのか、もとの様に自然に接し合う事が出来なくなってしまった。ぎこちない思いをするぐらいならと、ついつい目も逸らし、声もかけにくくなる。女将さんが、さらに心配し始めたがどうにもできない。

女将さんの心配と言えば心配事は別にもあった。ハルオの言葉の突っかかりだ。

幼児なのだからある程度たどたどしいのは仕方がないが、それにしてもハルオは言葉がよく引っ掛る。特に緊張する必要のないところでも、言葉がどもってばかりいる。

幼稚園の入園を前にして、私も女将さんも、ハルオにリラックスしておしゃべりが出来るようにならないかと、色々試したが、上手くいかない。

刃物嫌いも一向に直らず、鋏にまで脅えるような子になったハルオを、幼稚園に入園させるのは心配だったが、団体生活に慣れさせない訳にもいかない。女将さんは預かっている責任を感じ、懸命にハルオに向き合いながら幼稚園の門をくぐって行った。

私達は刃物に脅え、言葉がどもってしまうハルオを、気の小さな子だと思い込んでしまった。

実際ハルオは気の小さなところがあった。男の子にしては慎重派だったし、特別ひどい悪さをするような子でもなかった。幼稚園で苛められはしないかと、日々、気をもんだ。

ところが実際は真逆の問題が起こった。とにかくハルオの喧嘩が絶えないのだ。

女将さんを「ババア、ババア」と言われては、相手の子を殴りつけ、ウチが「普通の家じゃない」と言われては、張り倒し、「親無しのくせに、生意気だ」と言われては、蹴っ飛ばしてしまうのだ。

年齢的にも反抗期と重なってしまったのかもしれないが、それにしてもハルオは喧嘩に我慢が効かないようだ。喧嘩で名を売った父親の血がそうさせるのかもしれない。

ハルオだって相当仕返しされてるし、普通なら子供の喧嘩で済む事も、ウチが普通ではないだけに、すぐに親が園に文句を言ってくる。その都度女将さんは頭を下げているようだ。

「人の弱みをよってたかって指摘する、相手の子だって悪いじゃない。頭を下げてばかりいないで、ちょっとはハルオの味方になってあげてもいいんじゃない？」

私は女将さんにそう言った。しかし、

「私はね、華風さんに頼まれたの。この子は他のとりえは何にも要らないから、優しい子に育ててほしいって。実はね、ハルオの父親は見つかっているの」

「え？　じゃあ、父親の元に返すの？」

そのために預かっている子として、今まで接してきたのだ。

「そうもいかないの。父親はハルオの安全のために名前を変え、存在を消し、この世にいないはずの人間になっているの。そう簡単には名のることができなくなっているの」

そんな！　いくら我が子のためとはいえ、そこまでしなくてはならないなんて。

「そうまでして守っている子への唯一の親の願いが、優しい子に育つことなのよ。決して人を傷つけたり、暴力をふるったりすること

のない子に育つこと。私、それを叶えてあげるのが、自分の役目だと思っているの。本当の実の親に代わって、親の願いを叶えてあげたいのよ」

女将さんはひたすらハルオに言い聞かせる。優しい子になりなさいと。

30

組に頻繁に起こるようになった喧嘩沙汰。良平のこと、私のこと、ハルオのこと。女将さんには想像以上にいろんな負担がかかっていたのだろう。

ある日気分が悪いと言って食事もとらずに部屋に戻ったが、そのまま倒れてしまい、病院に運ばれた。

心臓が弱っていたらしい。そう言えば疲れたと言って頻繁に横になる事が増えているとは思っていたけど、そんなに悪くなっていたとは気がつかなかった。きっと無理をしていたに違いない。

その時はひと月足らずの入院で回復したが、それから女将さんは、体力ががっくりと落ちてしまったようだ。精神的負担が大きくかかった時や、疲労がたまった時に、短い入院を余儀なくされるようになってしまった。

この稼業でストレスを抱えるなと言う方が無理。頻繁に起こる喧嘩沙汰はどうしようもない。せめて女将さんを疲れさせないように、出来うる限りの家事や仕事を私も買って出る。

良平の義足も完成したので、私は良平の足慣らしもかねて、一緒に稽古をするのを再開した。

これをきっかけに良平とも普通に話せるようになれば、女将さんの心配も一つ減らせていいのだけど、これがなんだか上手くいかない。無用な言葉を言ったら、そこから余計なことまでいい出しそう

な気がした。

例えば「義足に慣れたら、私との稽古は不要なの？」とか、「なぜ、組長から距離を置くように言われた時に、私と口をきかないと言ったの？」とか、「どうしていまだに私を避けるような態度を取っているの？」とか。聞きたい事が色々溜まってしまっている。

でも、それを聞いてしまうのは怖かった。どんな答えが返って来ても、自分の中に納められないような気がする。良平の心を探るのはもっと怖い。以前、良平に誤解されて睨まれて以来、彼の心はほんのうわべを探る事さえ、普通に表情を読み取るのさえ、怖かった。

女将さんの前では心配かけたくないから、二人とも無口ながらも何でもない顔をしていたけど、女将さんにはどう映っていたのか、自信は無い。でも、そうするよりほかにどうしようもなかった。

ハルオの世話も私を頼ればいいのに、一層、女将さんはハルオが喧嘩をしないようにと気を使っていた。どもり癖が直らず、あまり成長が良くないハルオは小柄だったから、喧嘩を仕掛けてもやられて帰ってくる方が多かった。それでも女将さんはハルオが喧嘩をするたびに相手に謝り、ハルオには「人にやさしく接するように」と、口を酸っぱくして言い聞かせていた。

そのくせ、ハルオが大きな怪我をしていないか、深く傷つけられることを言われてはいないかと、いつも心配していた。

それも身体には良くないのかもしれないが、ハルオの事を気にかけるのは、女将さん自身、ハルオへの愛情を持て余すほどだからだろう。

いつか、返す子と言いながらも、ハルオは女将さんの生きがいに

なっているに違いない。そういうハルオを女将さんから引き放せば、かえってストレスになってしまう。私は心配しながらも、ハルオの世話は、なるべく女将さんに任せるようにした。

ハルオは小学生になり、相変わらず喧嘩をしては女将さんに小言を食らう日々。

それでも女将さんの心が届くのか、ハルオもだんだんむやみに相手に突っかかるような真似をしなくなってきた。どもりながらも自分の主張したい事は言葉で伝える努力をし、弱いものを助けて、他人に気を配る事を覚え始めた。何より人の優しさに応える事を覚え、女将さんを喜ばせていた。

組はあちこちからちょっかいを出されながらも、それなりに安定した状態を保っていた。大きな喧嘩になりそうな時は、先手を打って私と良平が助っ人に行った。

良平は不自由な身を補うべく鍛え続けたかいあって、新しい義足を使いこなせるようになると、喧嘩でもいっぺんに二人や三人相手にするくらいは、造作もなくなっていた。

特にドス使いの早さは驚くほどで、気づかぬうちに武器を払われ、倒されてしまうので、電光石火なんて通り名までついて回った。

倉田さんの義足は身体になじみがいいらしく、これまで以上に動きが良くなった。そもそも、それまで不安定な義足のまま私との稽古や、喧嘩の実戦に出ていたので、平行感覚や、普通では鍛えられることのない筋肉を十分に鍛えられていた。

そこに、良平独特の喧嘩の時の動きや、癖などを十分に考慮した、

特殊な義足を身に付けたのだ。身体に不利があるとは思えないような身のこなしをできるようになり、さらに、倉田さんと相談を重ね、新たな改良を加えようと研究をしていた。

私の千里眼も、徐々に話が広がって行く。私は単に相手の動きを読んで避け、睨んで威圧しているだけなのだけど、やはり特殊な力と言うのは必要以上に恐れられるようで、話に尾ひれがついて、私に睨まれれば気を失うとか、魂を抜かれるらしいとか、勝手な話が噂されていた。

その評判のおかげで、相手は私の姿を見ただけで目を合わせる事を嫌がった。私が出てくれば喧嘩にならない。しまいには「石にされる！」と叫んで逃げる奴までいた。私はメデューサか。

でも、シマにとっては喧嘩沙汰が起こるより、相手がさっさと逃げてくれる方が断然有り難い。私達は噂をおおいに利用し、尾ひれの着くままに放っておいた。このごろ孝之さんも老いが目立って助っ人に出せなくなってきたので、この評判は余計に都合が良かったのだ。

おかげで「真柴組には電光石火の良平と、千里眼の御子がいる。下手に手出しはできない」と言われ、組は安定を保つことが出来た。

私と良平が気まずいままでいる事や、女将さんの体調不良を覗けば、組は再びの平穏な日々を送ろうとしていた。

31

だが、私達が利用した噂は、逆にとんでもない事態も呼び寄せた。いつだって物事には好奇心を寄せる人間がいるもの。私の特殊な力は、普通ではない相手には挑戦せずにはいられないタイプの人間の、好奇心を刺激してしまったようだ。

ある、シマの店に二人連れの男がやって来て、突然暴れ出したかと思うと、

「千里眼の女と、電光石火の男を呼んでこい」

と、叫んだそうだ。

こんなご指名を受けたのは初めてだ。狙いが私達なら姿を見せれば、店に危害は加えないはず。私達は早速二人でその店に向かった。

「これが千里眼と、電光石火か」

男の一人がそう言って私達を出迎えた。ただしナイフを持って。

「成程、タダ者じゃなさそうだ」

もう一人の男も私達をじろじろ見ながらいう。こっちは意外にも丸腰。

「なんでそう思うわけ？」

不快な視線をさえぎるように私は聞いた。

「男の方は普通の鍛え方をしたわけじゃないだろう。身体を見れば分かる。まあ、女だったらもっと隅々まで良く知ってるんだろうが、俺はそこまで必要ない」

男達は私を見てニヤニヤしながら言う。ああ、私達をそう言う目で見てるんだ。だからこいつらの視線が不快だったんだわ。

「女は表情を見ればわかるさ。これは普通の肝の据わり方じゃない。何事にも動じない目をしている。こんな目で睨みを利かされちゃ、気の弱い奴ならすぐ、ビビるだろう」

丸腰男が言う。

「あんたは気が強そうね。睨んだくらいじゃビビってくれないみたい」

私は嫌みのつもりで言ったのだが、男の方は余裕ありげに言った。

「そうさ、俺はビビらない。俺は心を閉じる事が出来るんでね」

男はどこかのんびりと言う。

「心を、閉じる？」

どういう事？

「こういう事さ」

そう言った男の気配が突然消えた。いや、その姿は目に入っていたはず。だって、男が私に近付いて、真横に来たのを私は目で追っていたんだから。

でも、私は動けなかった。コイツの動きが早かったからでも、コイツに威圧されて身体が動かなかったわけでもない。なんて言うか……。コイツの動きが意識に入ってこなかったのだ。

男は完全に人としての気配を消していた。まるで音のしない物体か、影の様に移動しただけ。

私はただぼんやりと、コイツが私の真横に来るのを眺めていた。そしてその手が私の首に伸びた時、初めて気配が戻り、私は避けようとしたがあまりにも遅すぎた。男の手は私の首を、しっかりととらえてしまった。まるで気配のない丸腰相手に、良平も全く動けなかったらしい。

「まだ、力はくわえてない。だが、下手に動けばすぐ締め上げるぜ、お譲ちゃん。俺はもともと寺の息子だ。勿論さっさと勘当されてる。だが、糞坊主たちにくだらない修業をさせられて、人としての気配を消すすべだけは身についちまってるんだ。つまり、心を閉じたまま、無意識に身体を動かす事が出来るんだ。結構自由にな」

「とんでもない、不良坊主だったのね。修行させた人たちが気の毒だわ」

首をつかまれたままだが、私は言い返した。こういう時に黙っていられる気質じゃないのだ。

「ああ、気の毒がってやれ。おかげでお前の千里眼は俺には通用しないんだ。あんたにも気の毒なことだな」

千里眼をさえぎる奴も世の中にはいるのか。甘かった。油断したわ。

その時良平がわずかに動こうとした。だが、もう一人の男の動きも早く、良平にナイフを振りかざす。良平はそのナイフをドスで跳

ね返そうとしたが、

「うぐっ」

私は声が出てしまった。急に首を締めあげられ、首と喉に痛みが走り、息が出来ない。

良平の動きが止まると、私の首元も緩められた。思わず深呼吸する。

「下手に動くと女の喉元がへし折れるぜ。おとなしくしろ」

私の首をつかんだ男がそう言う。

「こいつは足が一本なくても生き延びた奴だ。指くらいなら屁でもないんじゃないか？」

そう言ってもう一人の男が良平のドスを握った指にナイフをあてがう。指から薄く血がにじんだ。

「やめなさい。あんたらタダじゃおかないわよ」

私はそう言ったが、さっき強く首を絞められたので、あまり声が出ない。良平が私を心配顔で見た。まずい。こんな表情見られちゃ、こいつらをつけ上がらせそう。

良平逃げて。あんた一人なら、まだ、逃げられるでしょ？　私は祈るような思いで良平の目を見るが、良平は逃げる気配もない。

それどころか私の首をつかむ男の隙を窺っている。つまり、自分の指を狙っている男に全く気がいっていないのだ。このままでは本

当に指を斬りおとされかねない。

そのうち男は私を使って良平をいたぶり始めた。良平が自分の指より私に気を取られている事に、彼らも気付いてしまった。私の首に力を入れたりゆるめたりを繰り返す。そのたびにつらい呼吸になってしまう。私も男の心を読もうとするが、私が目に力を入れようとする気配を察すると、スッと心を閉じてしまう。思った以上に勘がいい。せめて、良平だけでも逃げてくれないと。

でもこの様子じゃ良平は逃げてはくれない。コイツに隙を作らせなくちゃ。でも、息が苦しい。

「いい感じであえぐなあ。片足野郎だけじゃ無く俺達にも、もっと聞かせてもらおうか」

いやらしくニヤケながら私に手を伸ばし、身体に触ろうとする。ぞっと虫唾が走ったがその瞬間、コイツの心の隙が見えた。スケベ心のせいで気が緩んだのだ。

32

私は全神経を瞳に集中して男を睨んだ。

男の顔に恐怖が走った。私を振り落とすように手を離す。私は床にたたきつけられてしまう。

それとほとんど同時に良平がもう一方の男のナイフを弾き飛ばした。男がひるんだ隙に真っ直ぐ私をふりほどいた男に飛びかかって、首筋にドスをあてがった。

「失せろ」

良平は一言そう言ったが、男はすっかり戦意喪失していた。

「くそっ。帰るぞ」

ナイフの男がそう言うと、もう一人も青い顔で良平から逃れ、二人は脱兎のごとく逃げ出した。

私はすぐには動けなかった。首を絞められたせいもあったが、実は相手の動きが読めるので私は簡単に人に近寄られたり、触られると言う事が無い。だから今の事態にこれまでにない恐怖を味わった。全身に嫌な汗をかき、鳥肌が立った事が自分でも分かった。

「大丈夫か？」

良平にそう聞かれて、私は心から安堵していた。本当はすがりつきたいくらい怖かったし、すぐに感謝の言葉が言いたいくらいだっ

たのに、
「なんで逃げなかったのよ！　指、斬り落とされたらどうする気だったの？」
と、本心とは真逆の言葉が出てしまうのだから、分からない。
「俺が、こんな時にお前を置いて逃げるような男だと思ってんのか？」
良平がむっとして言い返す。
「こういう事に男も女もないわよ。言ったじゃない。私はかばう気も、かばわれる気もないって。足が無い上にドスまで握れなくなったら、どうする気だったのよ」
ダメだ。恐怖が安心に代わって、気持ちが緩んでる。言うつもりじゃ無い言葉が次々出てしまう。
「それでもお前、女だろうが。あいつら、あのままだたらお前に何してたか分かってんだろ？　大体お前、最初っから挑発的な態度だった。もうちょっとおとなしくしていられないのか？」
「それじゃ舐められるじゃない！　こっちだって顔を張らなきゃ！」
「女のくせに何が顔張るだ。無事で済んでるうちに足洗って堅気の嫁にでもなればいいんだ」
グサッときた。良平が私を組から追い出すようなことを言ったのはこれが初めてだった。
「私だって組員よ。人には無い、変な力だって持ってる。どこに行

くところがあるって言うのよ」
「お前が堅気の何を知ってるってんだ。世の中広いんだ。俺でさえ一時は受け入れてくれる女性がいた。お前にだって必ずいる。俺の足に同情してる暇があったら、自分のことを考えろ」

私は言い返しそこなった。良平が別れた彼女の事を持ちだしたのは、初めてのことだ。誰もが彼女の事は触れないようにして来たのに。良平も何も言わなかったのに。ここで彼女を持ち出すなんて、本気で私に足を洗わせてもいいと思っているのかしら？

「良平は、私がいなくてもいいって思ってんの？」

口が滑った。勢いで余計な事を聞いてしまった。正直、そう思った。良平の口が開きかけた時、孝之さんが現れた。私達の無事な姿を見て、ホッとした顔をする。良平は口を閉じてしまった。

「良かった。お二人とも無事で。店の子がお二人が危ないと飛び込んで来た時には、胆を冷やしました」
「悪かった。心配かけて」
良平は私からは目をそむけて、孝之さんに言った。

「私に謝っている場合じゃありませんよ。女将さんが大変なんです。お二人の事を聞いて、倒れられました。車の用意が出来てます。すぐ、病院に向かって下さい」

孝之さんの言葉に驚き、私達は急いで車に飛び乗った。

女将さんの容体は良くなかった。心臓が弱っていた上に、血圧が不安定な状態が続いていたらしいが、そこに私達の知らせを受けて、

一層のストレスが加わったらしい。

この稼業でストレスは避けられないとはいえ、私と良平は女将さんにとって身近な家族。その私達が二人いっぺんにピンチに陥ったのは、ショックが大きかったのかもしれない。

組長は不安そうにしているハルオを落ち着かせようと、「大丈夫」と言って背中をなでる事を繰り返している。私と良平は病室から離れて、廊下の椅子に座った。

「御子、お前だけでも足を洗って、堅気にならないか？　そうすれば女将さんの心配事が、一つだけでも減る」

良平があらためてそう、聞いた。私は返事が出来ない。良平が私にこういう事を言ってくるのは初めての事だった。私は良平だけは、私が組にいる事を望んでくれていると思っていたのに。

「堅気の嫁になれなんて言ったのは悪かった。だが、思い切って足を洗わないか？　組長も女将さんも内心それを望んでいると思うんだ」

「良平は組長になったら一人で組を守って行くつもり？」

私は返事をそらした。

「組長はどこだって一人だ。そして支えてくれるのは組員だ。こんな足で組を守りたいなんて言ってる俺を、みんなが支えてくれようとしている。俺、恵まれてるよ。お前は外の世界を見た方がいい。足の事で同情なんかしないでくれ」

「同情？」

「そうさ。お前は俺が足を失った時も、俺の心を共有したいと言っ

てくれた。俺との稽古をやめる事も断った。お前のそういう所に俺は甘えて来たが、もうダメだ。さっきはつらかった。今度あんな事があったら俺は耐えられない。お前から目を離せなくなって、お前を誤解させるかもしれない」

33

「どういう事よ？　何がいいたいの？」
「お前は人の心に共感できる分、同情心も強いんだ。それなのに俺の心配ばかりしていたら、俺に関心があると思い込みかねない。組長が俺をお前に近づけたがらないのはそれがあるからだ。お互いが誤解しかねないんだよ」
「誤解なんか、してないわよ。良平って、いつからそんなにうぬぼれ屋になったのかしら？」

私はそう言った。組長とかわした『二十歳の約束』が頭をかすめる。

「今はしなくても、いつか、するかもしれない。特に俺は自分でも脆いところがあると思う。さっきはどうしようもなくつらかったし、悔しかった。お前があんなことされるのを二度と見たくない。お前もこれまでにないくらい動揺してたし、こういう事を繰り返していたら、本当にお互い誤解を起こしかねないじゃないか」

繰り返される「誤解」という単語がいやに耳触りだ。

「そんなこと関係ないわ。私は真柴に育ててもらったの。私、ここが故郷で、大切な家なのよ」
「いい加減、親離れしろよ。いつまで居心地のいい巣の中にいるつもりだ。もう、お前だって子供じゃないんだぞ」

痛い所を突かれた。そう、私ももう、子供じゃない。いつまでも組長や女将さんの手の中にいられるわけじゃない。でも、

「私の居場所を、良平に決められたくなんかないわ。私は今、真柴にいたいの」

私がここにいたいのは私の意思。良平を巻き込んじゃいけない。それが二十歳で組長とかわした私の決意だ。今、私は自分自身にそれを誓い直す。真柴は居心地のいい巣ってだけの場所じゃない。私が生き続けるために必要な場所だ。私が守るべき場所だ。

どんなに良平が私を追い出したがっても、厄介がっても、これだけは譲れない。

「もう、良平との稽古はやめるわ。妹扱いも要らない。一組員として、きちんと私を認めてくれればいいの。喧嘩の助っ人も二人で行くのはやめる。それならいいでしょう？」

文句は言わせない。そんな思いを込めて良平を見る。良平はあきらめ顔になった。

「二人とも来なさい、佳苗の意識が回復したそうだ。もう、大丈夫だろう」

組長が病室から出て来て、声をかけてくれた。ハルオが私の足元に来て服の裾を引っ張る。二人とも安堵した表情だ。緊張から解放されて、空気が柔らんでいた。

「女将さんがこんな状態で、ハルオもまだ小さい。華風さんもいろいろ事情がありそうだし、こんな中で私、どこにも行けやしないわよ」

病室に入る直前、私は良平にそう言った。

翌日、私に電話がかかってきた。誰だろうと取ってみると懐かしい声が受話器から響いた。

「御子？　私、清美よ。分かる？」

そんなの分かるに決まってる。卒業した頃の弾むような話し方は少し、抑えられてはいるけれど、この声はまぎれもなく清美の声だ。

「懐かしいわ。どうしたの？　突然？」

そういうと、清美の方が電話口で「もうっ」とつぶやく。

「どうしたのじゃないわよ。御子の家の近くで、若い女性が喧嘩騒ぎを起こしたって聞いて、御子の家に電話をしたら、お母さん代わりの人が倒れて入院したって言うじゃない。御子、大変な思いをしてるんじゃないかと思ったのよ。何よ、心配かけて。大丈夫なの？」

清美の言葉に、ワッと心に温かさが広がる。私に電話をするなんて、彼女にはどんなに勇気が必要だったことだろう？

「何だか、今、大丈夫になった。清美の声、聞けたから」

私はホッとしてそう言った。

「ふうん。電話して良かったみたいね」

清美がからかうように言うのも、心が落ち着く。

「ありがとう、元気が出たわ。でも、女将さんが良くないのは確かなの。本当につらくなったらちゃんとこっちから電話するわ。無理、

しないで」
私は感謝をこめてそう言った。

そして私は本当に身動きが取れなくなった。女将さんの病状は深刻で、余命がそう、長くは無い事を組長から苦しげに告げられた。

そんなこと、何十年も先の話だと思っていたのに。私にとっては、たった一人の母なのに。まだなんの親孝行も出来てない。後悔と懺悔が心にあふれる。

入院していた方が治療しやすいと思うのだが、女将さんは戻りたがった。どんなに騒々しくても、次々と不安や心配事が舞い込んできても、組は女将さんにとっての家。私はその気持ちが痛いほど分かったので、女将さんと一緒になって組長やみんなを説得した。

組長は時間のある限り、女将さんと自室で過ごすようになった。ハルオも外に遊びに行くことなく、女将さんにまとわりついている。私達は出来るだけ三人が、普通の家族らしく暮らせる時間が持てるようにと気を使った。

私と良平も無駄に意識し合う事は無くなった。普通に会話もできるし、家族として暮らす事も出来る。良平にとって私は厄介者かもしれないけど、お互いに女将さんに穏やかに過ごしてほしい気持ちの方が上回っていたから。

あの騒動以来、組や私達に喧嘩を吹っかけられることは幸いにも無くなった。心を閉じる事が出来る男でさえ、私の千里眼にはかな

わなかった事が、パッと噂になって流れたらしい。ちょうど大きな組織「こてつ組」の力が強まっていた時でもあり、周りの組や組織は大きな出来事を嫌い、なりを潜めていた時期でもあった。

おかげで女将さんに必要以上の心配をかけずに済んで、私達は大いに助かった。女将さんは体調を見ながら入退院を繰り返していたが、ハルオの喧嘩癖もおさまり、穏やかな日々を過ごす事が出来た。

34

組長は女将さんとの旅行を計画し始めた。まともな旅行をほとんどした事が無いのだと言う。

「以前の抗争沙汰は今より激しかった。私達は結婚式の直前に騒ぎが起きて、式はおろか、花嫁の写真さえ撮れなかった。これが最後かと覚悟しながら籍を入れて、乱闘に出て行ったのだ。とても旅行なんて考えられなかった。せっかくだからそういう写真を撮れる所に行こう」

女将さんは「この年でウエディングドレスなんて」と言ったが、組長が自分の方が見たい。着物よりは身体の負担もないからと言って説得してしまう。

行き先は空気の良い高原の避暑地で、ハルオの他に私もボディーガード代わりを兼ねてついて行った。

組の事は良平に任された。本当は女将さんとの思い出作りなので、良平も連れて行きたかったが、組の留守も放っておくわけにもいかなかった。

旅行は楽しかった。避暑地ならではの美しい景色や、しゃれた建物、湖などを見て回ると、私も心が晴れ晴れとした。ハルオは初めて家族旅行らしい時間を過ごし、興奮気味なくらいだった。

組長は女将さんを気遣いながら、昔話に花を咲かせているようだ。二人とも穏やかな表情で、本当に来てよかったと思った。

その余韻が残るのか女将さんがハルオを見ている間、組長が女将さんと籍を入れた時の話を聞かせてくれた。

女将さんは他の組の組長の二女で、真柴組の事は理解した上での婚約だったそうだ。組長に何かあった時には組をたたみ、その組が組員達の面倒をみる。そして女将さんは実家に戻すと。

それでも組長は乱闘直前に籍を入れる事をためらった。ひょっとしたらこのまま帰れないかもしれない。たとえ実家に戻っても、出戻りとして肩身の狭い思いをさせるかもしれないと。

ところが女将さんは組長に、

「私、こんな大事な時に命を落とすような軟弱者を選んだ覚えはありません。あなたは絶対に帰ってくる。私が保証するから、ちゃんと署名捺印をして下さい」

と言って、ほとんど無理やり、ハンコを押させたそうなのだ。

「おかげでわしはいまだにこの世にいる。あいつを置いて先立ったりはできない。佳苗も今までに何度もつらい覚悟を繰り返してきたはずだ。今度はわしがあいつに付き添ってやる番だ。少しでも長く付き添えればいいんだが」

そう言って湖を見つめている。

「お前もいつ嫁いでもいい年だが、佳苗の様な思いはさせたくない。出来れば堅気に嫁いで欲しいが、最低でも式ぐらいきちんと挙げられる相手を選んでほしい」

そんな事をぽつりと言う。『二十歳の約束』が、また私の頭をかすめた。

撮影予定の教会に着いたのだが、女将さんの顔色が良くない。体調が悪そうだ。無理をさせられないと撮影は断り、教会を見学すると、予定を縮めてすぐに帰る事にした。

「今度、またの機会には必ず着替えて写真を撮ろうね」

私は女将さんにそう言ったけど、

「きれいな教会が見られて、私は十分よ。花嫁気分を味わったわ」

と、笑っていた。

「ダメダメ。今度は良平とこなくっちゃ。今回は留守番させちゃったんだから、次は良平に女将さんを独り占めさせないと」

私はそう笑った。自分が良平と旅行をするなんて想像できなかった。

旅行から帰ると、女将さんはすぐに入院した。やはりかなり体力を消耗したようだった。それでも女将さんは旅行の話を楽しそうに良平に聞かせたそうだ。

それからの女将さんは生活のほとんどを病院の入院生活で過ごしてしまった。私は午前中は家事に追われ、午後は病院で過ごし、夕方からはハルオと病院で交代して、組での事務を受けもった。その夕方の時間になると良平はシマの身回りや、店の様子をうかがいに行くようになり、私達は完全にすれ違うようになる。それぞれ気を使った事もあるが、何より互いに本当に忙しかった。

私は時折清美に電話をかけるようになっていた。彼女は高校時代

のあの彼と別れたばかりだった。十年付き合ったにもかかわらず、結局うまくいかなかったという。

私は自分がホッとしたくて電話をするのだが、気づけば清美の別れた彼の愚痴を聞かされた。嘘か誠か、女心の分からない奴だったと言い、意外と中身が小さかったと言い、懐のある男はこの世に沢山いると威勢のいい言葉を聞かされ、いつの間にかこっちまで元気になっていた。

街の景気が安定するに従い、この稼業も比較的落ち着きを見せると思ったが、一方でそれまでは意識していなかった組織がシマを狙ってくるようになった。

暴走族など若年層グループに金が流れ無視できない勢力となったり、国外からの集団によるスリや強盗など、街の治安の悪化によって起こる事態が、こっちの稼業にも影を落とし始めたのだ。

こういう相手に今までの様な古風なやり方は通用しない。特に、外国の人間では思考も感性も根本的に違ってしまう。裏社会は複雑化し、混迷を見せ始めていた。

そこで、街の巨大組織「こてつ組」が私達周辺組織と連携を図ろうと言ってきた。それまで抗争を繰り返してきた組織同士にそんな事が可能なのかは分からない。

でも、今のままではそうせざるを得ないのが現実だ。ウチの様な小さなところはこの波に逆らうわけにはいかない。組長と良平は連日のように各組織の人間たちと顔を合わせて話を詰めるようになっ

た。

私も良平もそれぞれに組の事と、女将さんの事で頭がいっぱいだった。自分の事を振り返る余裕なんてなくなってしまっていた。

35

私は心細くなると、清美に電話をかけた。彼女の声を聞くだけで、この世界に染まり切ってしまう前に戻ったような気がして、とても落ち着く事が出来た。

でもある日、彼女から電話が来て

「私さ、結婚が決まったんだよね。十年付き合った彼とはダメだったのに、何故か今度は勢いづいちゃって」

と、照れ臭そうな笑い声を交えて言った。

「えっ？　おめでとう。なんだあ、良かったじゃない。清美、結婚あきらめたのかと心配したよ」

「ふふ、ホント。自分でも不思議。御子はどうなの？　足洗って誰かと、って事は無いの？」

「私が足洗ったりすると思う？」

「あり得ないか。そういう世界の事は分かんないからなあ。ひょっとして、とか思っちゃったんだ。御子も一人じゃさみしいだろうし。それとも組の中に好きな人、いる？　あの、お兄さん代わりの人は？」

良平の事だ。私は笑い飛ばそうとした。彼は私には家族だと。

ところが言葉が凍りついて出てこない。私は少し呼吸を整えると、

「いやに詮索するじゃない？　自分が幸せすぎて、そっちにしか関心無くなってるの？」と聞く。

「意識してるんだね。その人のこと。そういう所って、簡単に一緒

になったりって、出来ないの？」
「良平とは、何でもないよ」
二十歳の約束を思い出しながら、機械的にそう言った。
「ごめん。余計なことだね。ただ、もうこうやって電話もしづらくなりそうだから」
清美の声のトーンがさがる。それは分かってる。結婚となれば家の事や、相手の家族の事もある。私なんかと付き合いがあっていいはずがない。清美は私に、お別れの電話をかけてくれたのだ。
「分かってるわ。式にも出れないし、お祝いも贈れない。悪いわね。友達がいが無くって」
「本当よ、足も洗わないで。でも、御子のそういう信念に憧れるわ。普通の生き方とは違うかもしれないけど、御子もちゃんと、幸せになってよ。じゃなきゃ、その世界に入ったこと、許さないからね」
清美はそう言ってくれた。彼女がいなければ私はこんなに人を信じる事が出来なかったかもしれない。
高校さえもいかなかったかもしれないし、行っても、卒業できなかったかもしれない。
この稼業をしていると、こんな友情さえ、手放さなければならない。それでも私は真柴を離れようとは思えないのだ。これは一体、何なのだろう？
ともあれ私は清美と連絡を再び絶った。清美からも連絡はこなかった。もう、生き方を違えた私達は、関わり合う事は無いだろう。悲しいけれど、それが私の選んだ道だった。

ハルオも同年代の子よりしっかりした子に育ち、かなりの家事を任せる事が出来るようになった。入院中の女将さんのちょっとしたお使いや組長の自室の掃除くらいはきちんとやってくれるようになり、慎重で何事にも丁寧な性格が、こういう作業に向いているようだ。

女将さんは頻繁に、

「ハルオは優しい子に育ってくれた」と、目を細めるようになった。

「ハルオは優しく育ってくれたのに、私の手で華風さんに返すのは難しくなったわ。あとは御子、あなたにお願いするわ。ハルオを見守ってやってちょうだい」

そんな気弱な事も言う。

「その約束は女将さんがしたんでしょう？　女将さん自身が守らなきゃ」

「そうね。これ以上あなたにお願いごとを増やすのは酷ね。それでなくても御子は組を愛するあまり、良平を遠ざけて来たんだから」

そんなことない。と、否定の言葉を言おうとして、女将さんの表情に声が出なくなった。

「良平は組長に似たわ。組の事を考えるあまり、何でも責任を背負おうとしてしまう。御子は私に似て組や良平を想うあまり、自分の愛情に背を向けてしまう。私がハルオを想うあまり、ハルオを真っ直ぐ愛してあげられなかったようにね。血は繋がっていないのに、不思議だわ」

「心は繋がっています。お母さん」

私は胸がいっぱいになって言った。

「私はハルオに可哀想な事をしたわ。あなたは同じ轍を踏んではダメ。あなた達を縛るものなんて本当は何にもないの。あなた達が何かに脅えて、自由になるのを拒んでいるだけなのよ」

そんな会話を交わしたひと月後、女将さんは静かに息を引き取った。とうとう組長が望んだ、花嫁姿の写真も撮ることなく、遠い世界に旅立ってしまった。

みんなが悲しみにくれる中、組ではハルオをどうするかの問題が持ち上がった。女将さんがいなくなり、ハルオももう、幼児ではない。ハルオの父親の話題もこの世界で聞く事は無くなり、華風組も跡は組長の息子が継ぐことがほとんど決まっている。息子が継げない事態が起きても、その従兄が継ぐことになっていると言う。ハルオが華風に帰って行っても、今更波風は立ちそうもない。

華風の組長も、可愛がっていた妹の生んだたった一人の子、長らく預けて申し訳なかったが、戻って来てくれるものなら、大切に育てたいと言っているらしい。

向こうの組長が亡くなった妹さんを溺愛していたのは有名だった。だからその言葉に嘘は無いだろう。

心からハルオが帰るのを望んでいたと思う。でも、ハルオははっきり言った。

「こ、ここが、ボクの家だ」

この一言ですべて決まった。私達はハルオの意思を尊重する事を向こうに伝えた。

華風の組長は落胆した様だが、

「ハルオの気持ちを考えれば当然だ。私達が今更ハルオに何も求めることはできない。真柴さんにはお世話になりっぱなしで申し訳ないが、どうか、ハルオの望む生き方をさせてやって下さい」

そう言って、ハルオを真柴の籍に入れる事を承諾してくれた。

36

これで良平とハルオは、戸籍の上でも兄弟となった。今までだって私達は家族として暮らしてきたが、その中で私だけが中途半端な立場のままだった。

私はこの際、自分も組長の養女にしてほしいと願い出た。しかし組長は許してくれない。

「女は堅気と結婚する事もある。せっかく足を洗っても、真柴の苗字では都合の悪い事が起こるかもしれない。お前をわしの籍に入れる訳にはいかない」

と言って譲らないのだ。

これが厄介なきっかけになった。組長が私を堅気の嫁にしたいと、また、考え始めたのだ。

前に組長が私に見合いをさせようともくろんだ時、私はまだ十代だった。誰もが私の意思を無視して若すぎる結婚を急がせようとする組長にあきれ、私の味方をしてくれた。

でも今度はそうはいかない。そろそろ相応の年齢になった私をこのまま組に縛っていていいのかと、誰もが戸惑っているのが分かる。私が足を洗うにはおそらくこれが最後のチャンスだろうと考えているのが、力に頼らずともすぐに分かった。

組長があちこちに話のあてを頼りだした。今度は近くがいいだの、自分の知り合いがいいだのという条件にこだわることは無いらしく、

組員達も巻き込んで良い話は無いかと積極的に聞いて回っているらしい。相当本気なんだろう。

そして私自身も今度は迷いがあった。私はこのままここに居ていいんだろうか？　もう、女将さんもいない。女の私は何かとかばわれてしまう。みんな子供の頃から知っている私をいつまでも半人前に見ている。このままじゃいつまで経ってもみんなに守られる存在から脱する事が出来ない。

それを悔しく思っていながら、私はどうしてこの稼業にこだわるんだろう？　勿論、真柴にいたいからだ。ここは私の故郷で、家で、かけがえのない場所だから。

じゃあ、どうしてそう思うんだろう？　堅気の世界にも友情はあった。店の人たちも親切だった。お父さんとの思い出もある。他の世界へ踏み出してもいいのに、それでも私は真柴に居たい。

ここには女将さんの思い出が詰まってる。組長と懸命に分かりあおうとした日々も積み重なっている。初めてたくさんの人たちが私を受け入れてくれた場所でもあった。ハルオの事も女将さんに代わって見守ってやりたい。

そして、良平もいる。

私の大好きな組のために、身体を張って組を守り、足を失っても組を継ぐことを厭わない人。失った足に苦しみながらも、臆することなくまた、身体を張って組を守り続けてくれる人。

そして本当に、真っ直ぐに人の善意を受け入れられる人。

自分を深く省みて、驚いた。心を占める良平の存在が大きい。

私は自分の親しい人の心の底は、決して覗かないと思っていたのに、良平だけは全力で受け止めた事があった。あの時は良平が足を失ったばかりで、きっと、恐ろしいほどの絶望にさいなまれていると思い、覚悟をして彼の心を受け止めたんだっけ。

でも、そこに絶望は無かった。恨みも、苦悩も、未来への不安さえ、無かった。

あったのは、ただ、感謝の心だけ。組を継ぐと言う希望を与えられた事への感謝、私達と家族になる事が出来る事への感謝、自分に愛が向けられている事への感謝だけだった。

あんな綺麗な気持ち、私は味わった事が無かった。良平はそれを持っている。私はそれをあの瞬間共有できた。私の心では決して味わえなかった気持ちを。

良平が彼女に口づけている所に居あわせてしまった時、どうしようもなくあの場から逃げたくなった。じっとしてなんかいられなかった。あの時は罪悪感からだと思ったけど、今思えば彼の中にある心の綺麗さに、私はすでに心のどこかで惹かれ始めていたのかもしれない。

それに良平は私をただ、妹の様に可愛がったわけじゃ無かった。私が組の役に立ちたがっていることを認め、私の稽古に付き合い、

何より私のこの能力を認めてくれた。

真柴の人たちは私の能力を気味悪がらずにいてくれた。むしろ、気に留めずにいてくれたと言った方がいい。でも、良平は私の持っている能力を認めてくれた。

私の『力』が身を守ることを理解し、『力』を使う事を手伝ってくれた。目を合わせなくなっても、　口もきけなくなっても、いつでも私を認めてくれていた。私は良平に見守られながら生きて来た。

私も良平を見守ってきた。彼が悩めば我が事のように胸が痛んだし、自分が彼を苦しめる「かせ」になんかなりたくなかった。私達は長い間、そうやって生きて来てしまった。もう、良平は私の心の中に住みついてしまっている。

だから私、ここを離れられないんだ。組からも、良平からも、離れられない。

良平の事で甘い感情は無い。そういう事に溺れるには、私の持つ『力』は残酷すぎた。

だから私は良平を遠ざけたのかもしれない。組長との『二十歳の約束』なんて、本当は大したことじゃない。私は怖かった。良平の心が少しでも見えてしまう事が。

良平は私が組から離れる事を望んでいた。でも良平自身から離れる事を望んでいるのかどうかは分からない。その質問の答えを私は聞きそびれてしまっている。

そして、その答えを今となっては聞きたくない自分がいた。心を見てしまうのも嫌だ。

以前に見た、彼の綺麗な心。あれ以外のものは見たくない。あれだけを自分の心に焼きつけておきたい。私にはその気持ちが強すぎる。良平がわずかにでも私を疎んでいる気持ちなんて見たくない。もう、私は真っ直ぐに良平の心を見つめることはできない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2577x/

こてつ物語番外編　千里眼の御子

2011年11月7日12時01分発行